

長野県更埴市屋代遺跡群

# 大塚遺跡Ⅱ

—更埴市立屋代中学校改築に伴う発掘調査報告書—

2000

更埴市教育委員会



長野県更埴市屋代遺跡群




# 大塚遺跡 II

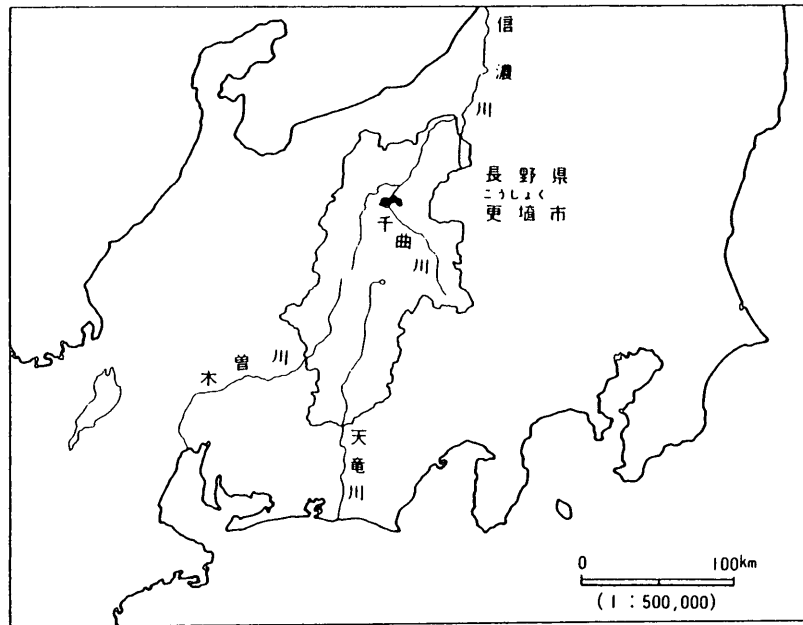
—更埴市立屋代中学校改築に伴う発掘調査報告書—

2000

更埴市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、平成9～11年度に更埴市立屋代中学校改築に伴い実施した、屋代遺跡群大塚遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集及び執筆は調査担当者が行った。
- 3 現場における実測図は担当者及び国光一穂が作成し、遺物の実測は担当者が行った。
- 4 本文中の遺構、遺物実測図の縮尺、表現は原則的に下記のとおりであるが、一部異なるものがある。
  - ・遺構： 住居跡 1／60      土坑 1／30  
遺物： 土器 1／4      石器 1／3      玉類 1／1
  - ・遺構図版の  は焼土、 は炭化物を表している。  
遺物図版の  は黒色処理を表している。また、須恵器は断面を黒塗り、灰釉陶器はスクリーンパターンで表現した。
  - ・住居跡の主軸方向はカマド、または北壁を中心に設定した。
- 5 本書中の方位は平面直角座標系第Ⅷ系の座標北を示す。また標高は海拔mで示した。
- 6 本調査に伴う出土遺物、実測図、写真等の資料は全て更埴市教育委員会が保管している。なお、出土遺物には、大塚遺跡を略して「OTK」と表記した。



更埴市の位置

# 目 次

## 例 言・目 次

第 1 章 調査の概要	1
第 2 章 発掘調査に至る経過	2
第 3 章 遺跡の環境	3
第 4 章 遺構と遺物	
第 1 節 概要	4
第 2 節 古墳時代	9
第 3 節 平安時代	15
第 5 章 まとめ	27

## 写真図版

# 第1章 調査の概要

- 1 調査遺跡名 <sup>やしろ</sup>屋代遺跡群 <sup>おおつか</sup>大塚遺跡 (市台帳 No.31-1)
- 2 所在地及び  
土地所有者 更埴市
- 3 原因及び  
事業委託者 更埴市 (学校教育課)
- 4 調査の内容 発掘調査約3,800㎡ (平成9年度1,700㎡、10年度1,800㎡、11年度300㎡)
- 5 調査期間 発掘調査 平成9年4月21日～平成9年12月11日  
平成10年4月16日～平成10年6月24日  
平成11年4月12日～平成11年5月7日  
整理調査 平成10年1月12日～平成12年3月29日
- 6 調査費用 18,833,144円
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会  
担当者 小野紀男 更埴市教育委員会  
調査参加者 岩崎鷹雄 宇都宮義久 岡田栄子 春日有子 金井順子 金田良一  
国光一穂 小林昌子 小松よね 中村玲子 西沢拾太郎 堀内広人  
松林深水 松本 晃 宮崎恵子 宮崎米雄 柳沢君雄 柳沢悦子  
事務局 下崎文義 教育長  
矢島弘夫 教育次長 (平成9年度) 竹内幸義 教育次長 (平成10年度～)  
西巻 功 文化課長 (平成9年度) 坂口寛子 文化課長 (平成10年度)  
西沢秀文 生涯学習課長 (平成11年度)  
下崎雅信 文化財係長 (～平成10年度) 金井幸二 文化財係長 (平成11年度)  
春原峰子 佐藤信之 小野紀男 宮島裕明 文化財係
- 委託等業者 重機 嶋田商会(有) 測量 (株)光陽測量 報告書印刷 信毎書籍印刷(株)
- 8 種別・時期 集落跡 古墳時代～中世  
遺構・遺物 古墳時代 竪穴住居跡 9棟  
土坑 1基  
溝跡 5基  
平安時代 竪穴住居跡 15棟  
土坑 6基  
水田面 1面  
溝跡 9基  
中世 土坑 2基  
溝跡 5基  
出土遺物 古墳時代～中世 コンテナ20箱

## 第2章 発掘調査に至る経過

平成8年9月、更埴市学校教育課より更埴市立屋代中学校改築計画が事業化されるとの連絡があった。当該地は屋代遺跡群大塚遺跡内であり、昭和43年に校庭の一部が発掘調査され、平安時代の住居跡などが検出されているため、その保護について協議を行った。その結果、平成9年度より発掘調査を行うこととなったが、平成8年度中に試掘調査を実施し、遺構の有無を確認し調査範囲を絞り込むこととした。平成9年3月29日、予定地内に3か所のトレンチを設定して試掘調査を行ったところ、いずれのトレンチからも現地表下約1.3mより平安時代と考えられる水田面を確認した。4月17日、現地において調査方法等の打ち合わせを行い、4月21日より南校舎地区東半部の重機による表土剥ぎを開始した。6月19日埋め戻しを終え、調査を一時中断した。10月7日、南校舎地区西半部の重機入れを行い、11月19日終了した。引き続き11月20日より北校舎地区の一部調査を開始し、12月11日終了し、本年度における調査を終了した。平成10年度に入り、4月16日より武道場地区、相談室地区、北校舎地区の調査を開始し、6月12日に空撮を行い、6月24日終了した。平成11年度は4月12日より部室地区の調査を開始し、5月7日終了した。

### 調査日誌

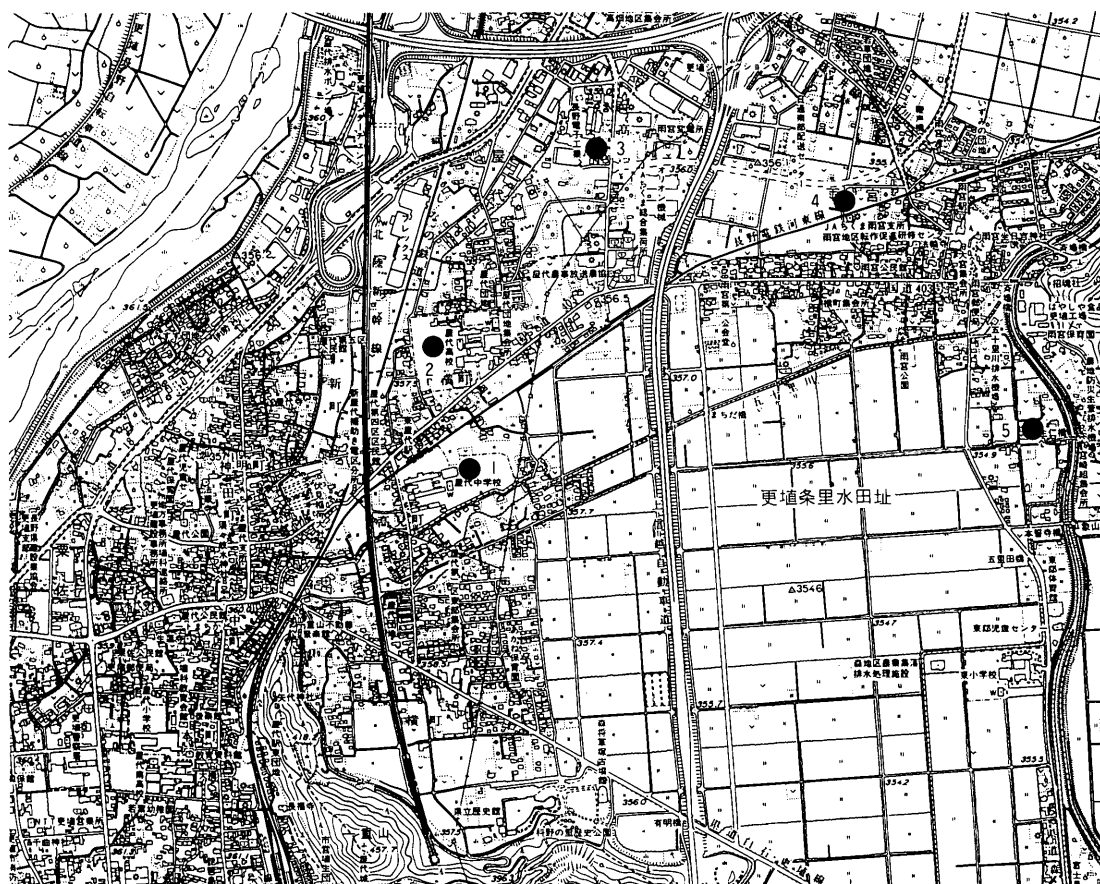
平成9年度		11月20日	北校舎地区の重機による表土剥ぎ開始
4月21日	南校舎地区東半部の重機による表土剥ぎ開始	11月25日	作業員入り、検出作業開始
4月22日	作業員入り、検出作業開始 基準点測量実施	12月11日	埋め戻しを終え、本年度の調査を終了とする
4月25日	平安時代流路検出	平成10年度	
5月6日	平安時代土坑墓検出	4月16日	武道場の重機による表土剥ぎ開始
5月20～23日	屋代中学校生徒見学	5月12日	相談室地区調査開始
6月4日	古墳時代流路検出	5月13日	南校舎地区の重機による表土剥ぎ開始
6月11日	作業員終了、機材撤収	5月14日	相談室地区より住居跡検出
6月19日	重機による埋め戻しを終え、調査を一時中断する	6月12日	空撮実施
10月7日	南校舎地区西半部の重機による表土剥ぎ開始	6月19日	作業員本日をもって終了
10月9日	作業員入り、検出作業開始	6月24日	埋め戻しを終え、調査終了
10月13日	基準点測量実施	平成11年度	
10月24日	最初の住居跡検出	4月12日	部室地区調査開始
11月14日	検出作業終了	4月14日	住居跡検出 基準点測量実施
11月19日	重機による埋め戻しを終え、南校舎地区の調査を完了する	5月7日	実測、機材撤収を終え本日をもって調査を終了とする

### 第3章 遺跡の環境

発掘調査地は、東経138度8分13秒、北緯36度32分19秒、海拔357m付近に位置し、長野県更埴市大字屋代字大塚に所在する。遺跡は、千曲川が北西から北東に大きく流れを変える部分の東岸に形成された広大な自然堤防上に営まれたもので、周辺の遺跡を含めて屋代遺跡群として把握されている。この自然堤防の南側の後背湿地は「屋代田んぼ」と呼ばれ、古くから水田として利用され、昭和36年から39年にかけて、国内初ともいえる、埋没条里地割の総合学術調査が行われ、その実態が明らかにされている。

屋代遺跡群は、東西3.5km、南北1kmにわたって展開する更埴市最大の遺跡群で、馬口、城ノ内、町浦、生仁遺跡等が含まれている。上信越自動車道建設に伴い、長野県埋蔵文化財センターによって行われた発掘調査では、国府・郡府木簡を始めとする多量の木製品の出土や、大型の掘立柱建物跡が検出され、また平成7年度より更埴市教育委員会により調査が行われている、国道403号線土口バイパスの発掘調査では、やはり大型の掘立柱建物跡の検出等と共に、県内では2例目となる唐三彩の出土があり、周辺に官衙が存在していた可能性が指摘されている。

大塚遺跡では、昭和43年に校庭南東隅の一部が発掘調査され、平安時代の住居跡が検出されているが、調査面積がごく僅かであるためにその実態は明らかとなっていない。



1 大塚遺跡 2 馬口遺跡 3 城ノ内遺跡 4 町浦遺跡 5 生仁遺跡

第1図 遺跡位置図 (1:20,000)

## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 概要

調査により検出した遺構は、竪穴住居跡24棟、土坑9基、溝跡19基、水田面1面などである。住居跡の内訳は、古墳時代9棟、平安時代15棟であり、古墳時代、平安時代の流路跡を各1基検出している。また、水田面は平安時代に属するものと考えられ、いわゆる「仁和の洪水砂」の直下より検出したものである。

古墳時代とした住居跡のうち、1、20号住居跡からは羽口、鉄滓などが出土し、検出した炉壁には鉄滓が付着していたため、鍛冶遺構である可能性が非常に高いものである。出土遺物からいずれも5世紀代に属すると考えられる遺構である。

平安時代の住居跡は総数15棟検出している。このうち11棟を相談室地区から検出している。また北校舎地区から検出した住居跡は水田面の下層より検出しており、水田を造成する際に廃棄された可能性が考えられる。水田面からは畦畔を検出しており、上信越自動車道建設などに伴う発掘調査成果から推測される更埴条里水田の畦畔走向とほぼ一致している。

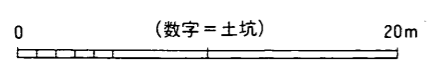
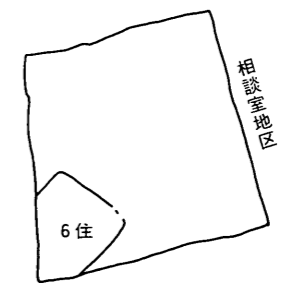
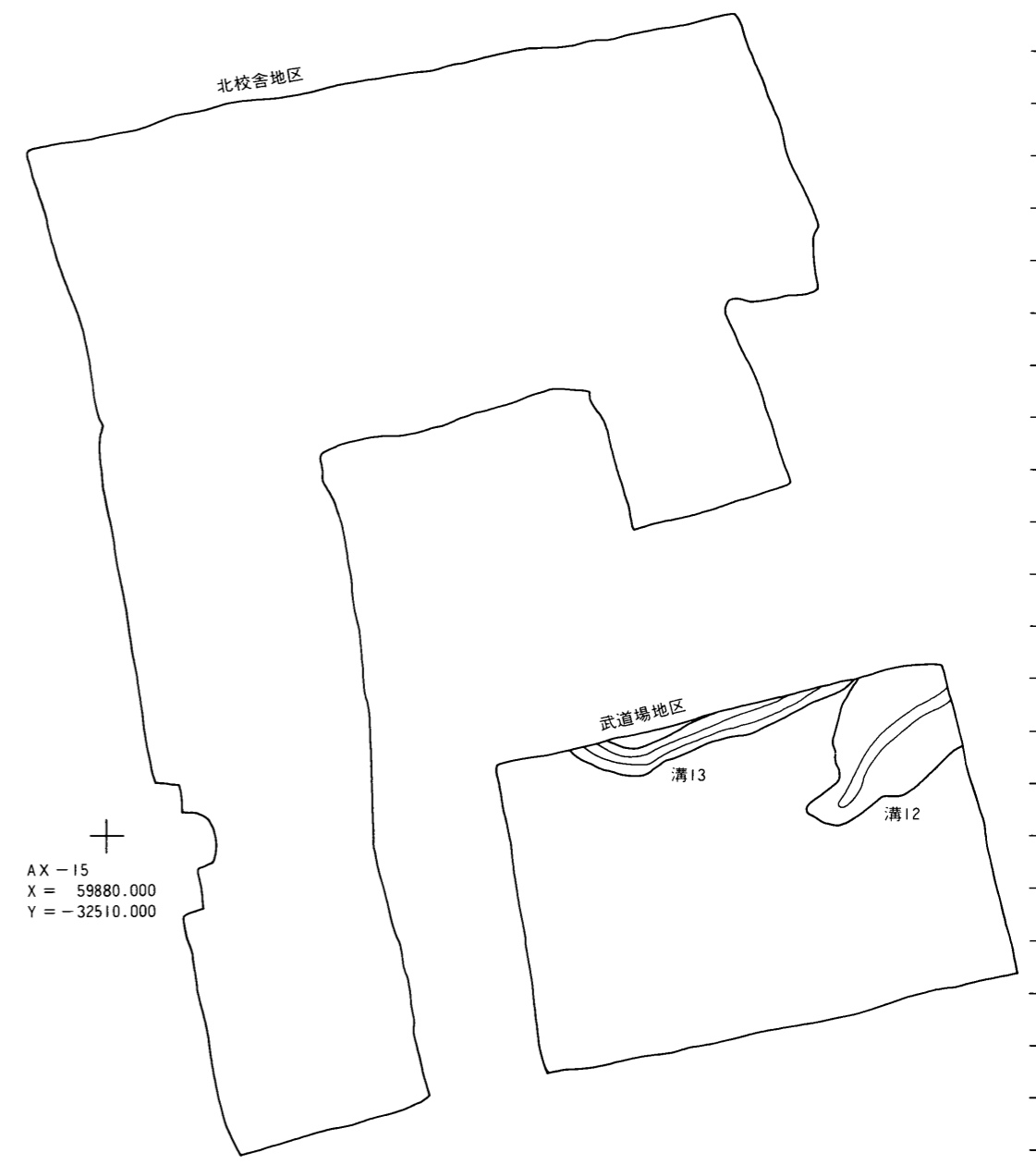
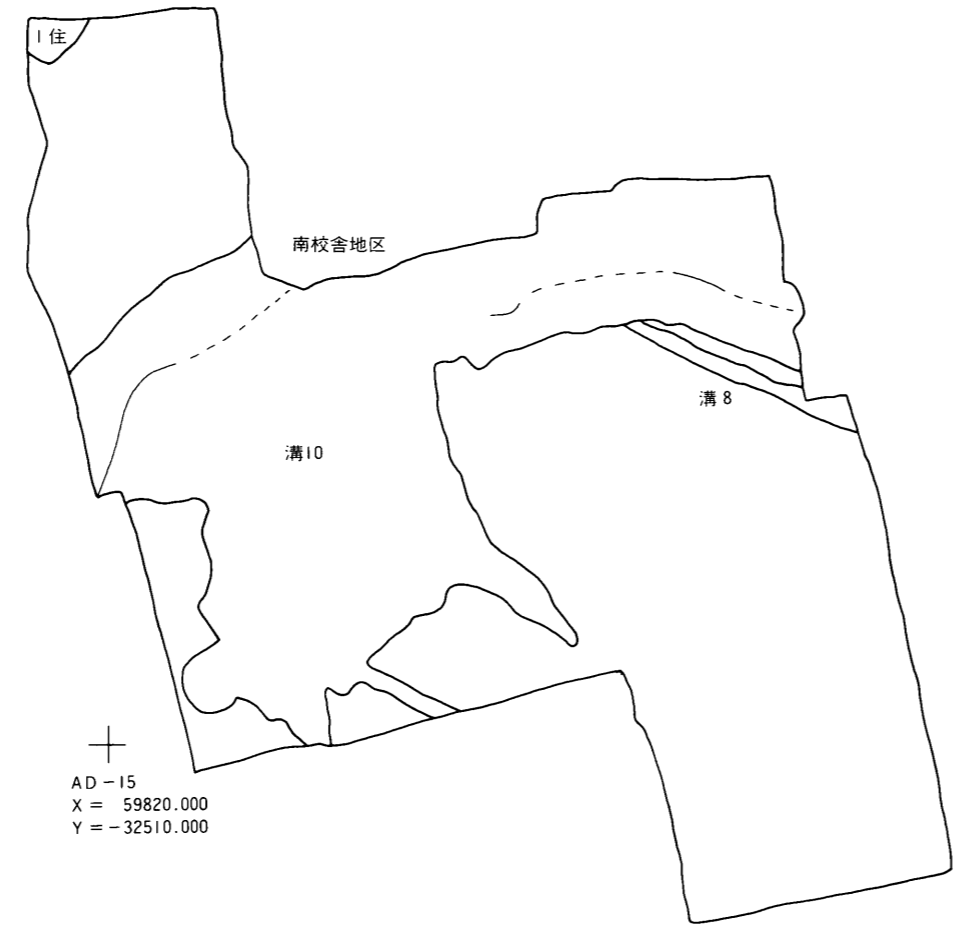
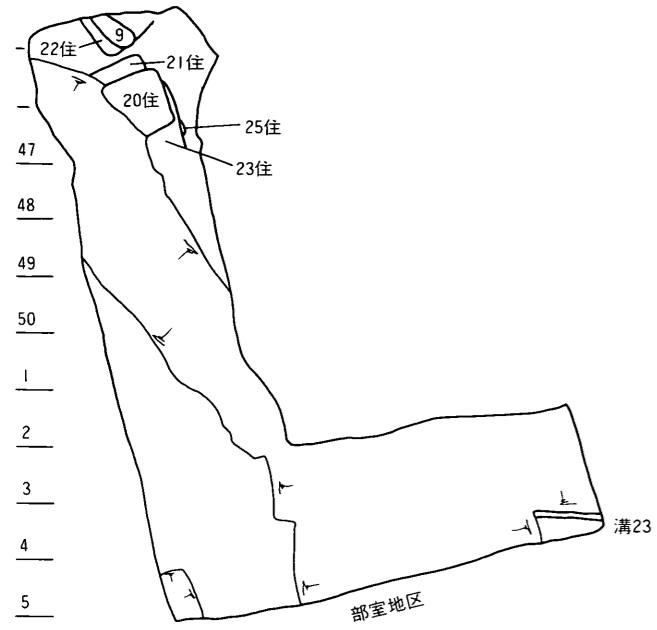
出土遺物は土器、金属器、石製品、鍛冶関連遺物などコンテナ20箱にのぼる。このうち金属器には青銅製の帯金具や、鉄製紡錘具など、石製品としては勾玉などが出土している。



第2図 発掘調査風景



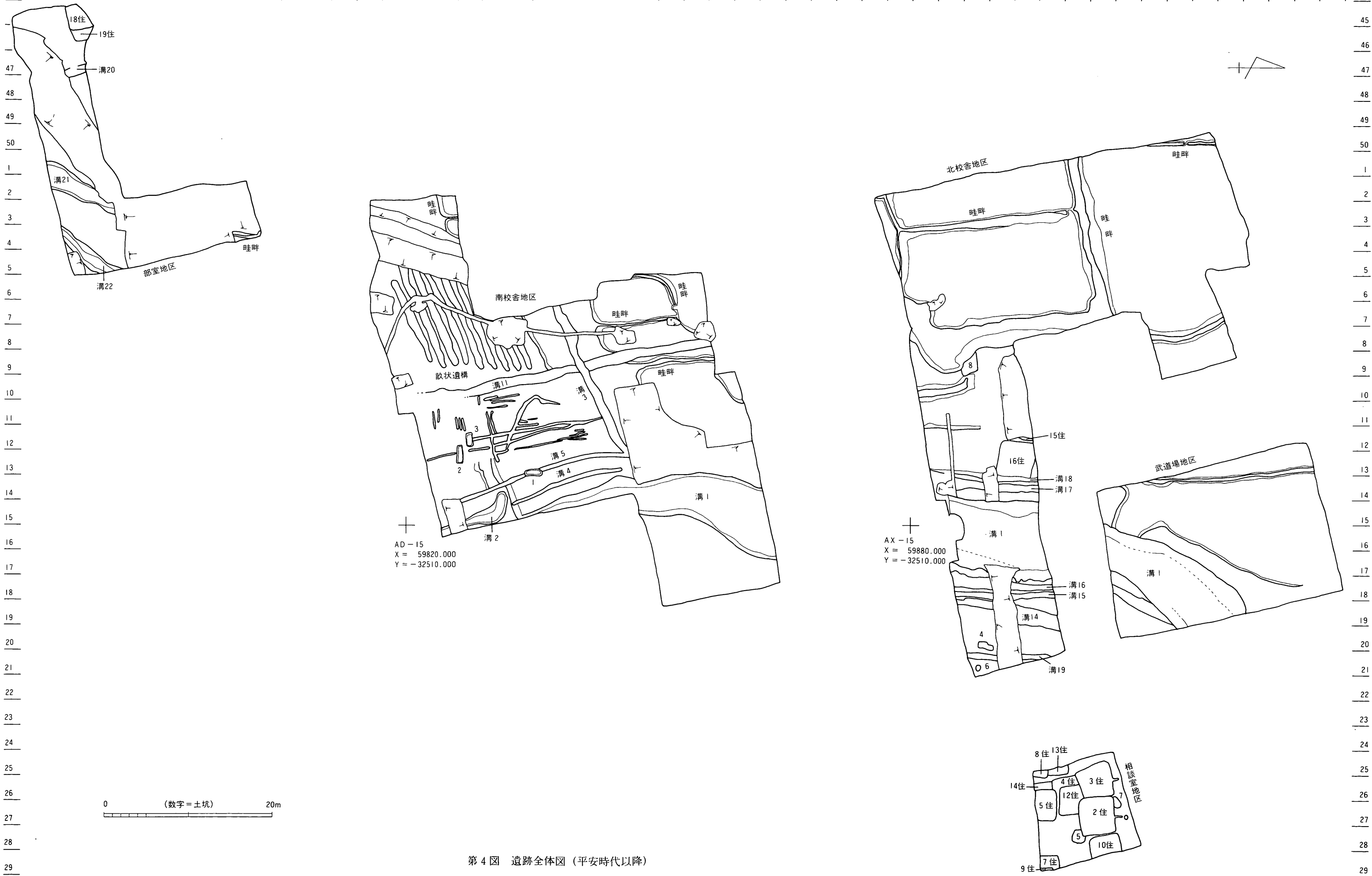
44 | DO | DP | DQ | DR | DS | DT | DU | DV | DW | DX | DY | DZ | AA | AB | AC | AD | AE | AF | AG | AH | AI | AJ | AK | AL | AM | AN | AO | AP | AQ | AR | AS | AT | AU | AV | AW | AX | AY | AZ | BA | BB | BC | BD | BE | BF | BG | BH | BI | BJ | BK | BL | BM | BN | BO | 44



第3図 遺跡全体図 (古墳時代)

DO | DP | DQ | DR | DS | DT | DU | DV | DW | DX | DY | DZ | AA | AB | AC | AD | AE | AF | AG | AH | AI | AJ | AK | AL | AM | AN | AO | AP | AQ | AR | AS | AT | AU | AV | AW | AX | AY | AZ | BA | BB | BC | BD | BE | BF | BG | BH | BI | BJ | BK | BL | BM | BN | BO





第4図 遺跡全体図 (平安時代以降)



## 第2節 古墳時代

1号住居跡 (第5・6図、図版3・4・8)

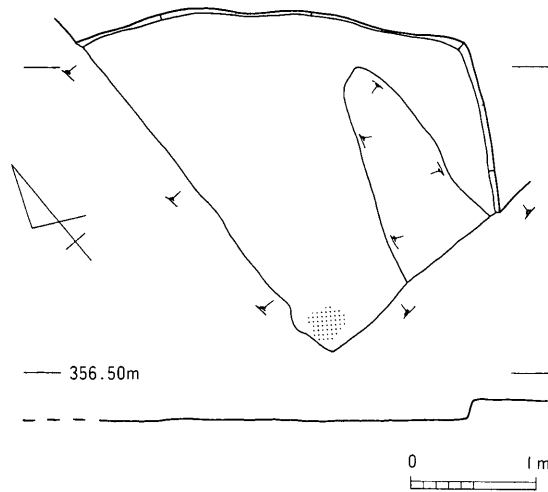
位置：AC-2

規模：不明

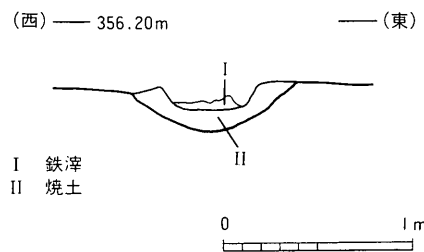
平面形：方形

主軸方向：N-40°-E

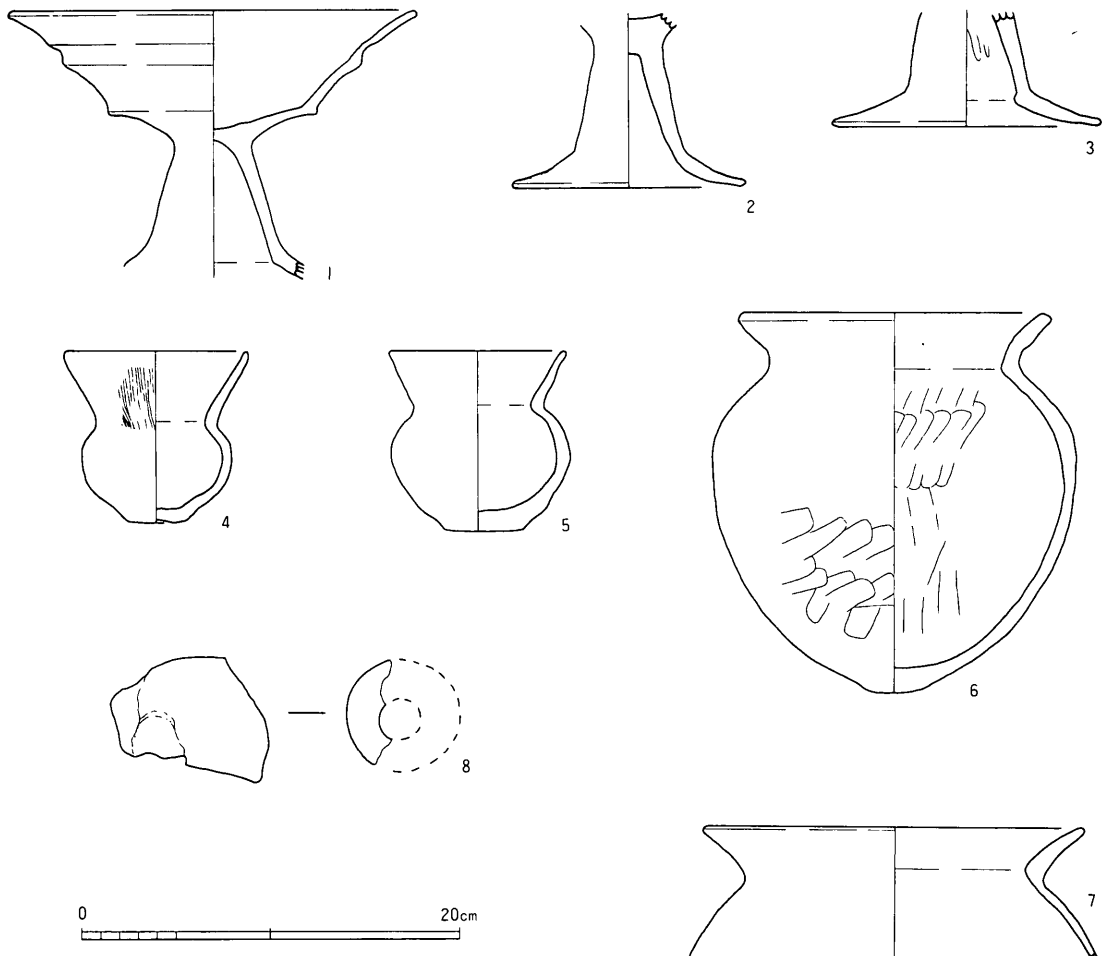
新旧関係：なし



床面：ほぼ平坦であり、顕著であった。  
壁：平安時代の水田面の下層より検出しているため、残りは良くない。最大壁高15cmを測る。



第5図 1号住居跡及び炉断面



第6図 1号住居跡出土遺物

炉：調査区の南東隅、住居跡のほぼ中央に当たると考えられる位置より地床炉1基を検出している。直径約40cmで、底面には鉄滓が付着していた。

遺物：炉の周囲を中心として出土しているが、上部が削平されていたため出土量はそれほど多くない。1～3は高坏である。1の坏部には2段の明瞭な段が認められる。2、3は脚部であり円筒形に近い筒部から大きく裾が開く、いわゆる「屈折脚高坏」の形態を呈している。4、5は小型丸底土器であると考えられるが、底部は平底である。4の外面にはハケが認められる。6、7は甕である。いずれも口頸部が「く」の字に屈曲するものである。6は丸底で球形に近い胴部を持ち、胴上半部外面をナデ、胴下半部及び内面にはヘラケズリが認められる。8は羽口である。外面は還元焼成を受けたと考えられ、青灰色を呈している。

本住居跡は、鉄滓の付着した炉の検出や羽口の出土から、鍛冶関連遺構である可能性が高いものと考えられ、出土遺物から5世紀前半代と考えられる。

### 20号住居跡（第7～9図、図版4・8・13）

位置：D O・D P-45・46      規模：3.20m×      平面形：隅丸方形

主軸方向：N-21°-W      新旧関係：17、21、23、25号住居跡を切る。

床面：ほぼ平坦であり、良く叩き締められた床面であった。

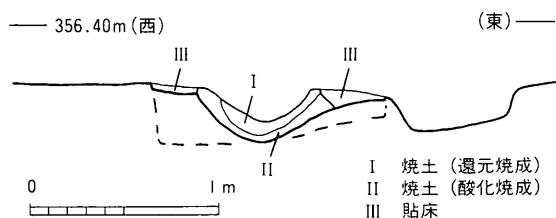
壁：ほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高55cmを測る。

柱穴：7基のピットを検出しているが掘り込みはいずれも浅く、支柱穴と考えられるものはない。

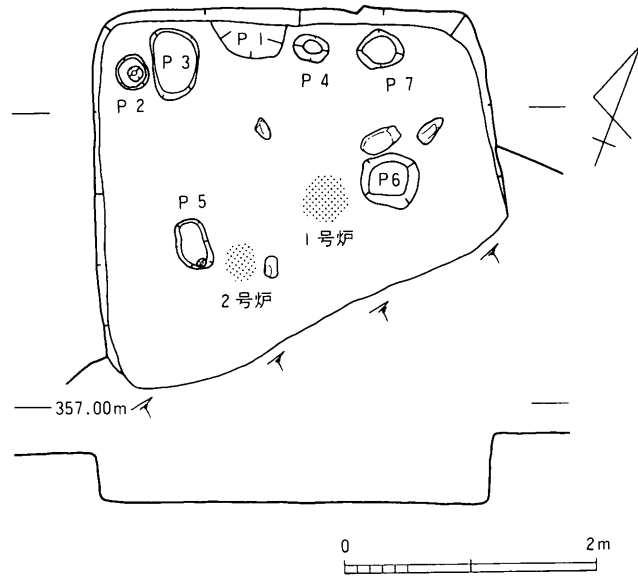
炉：住居跡内ほぼ中央と西寄りのところから2基の地床炉を検出した。1号炉は直径約35cmで、表面は青灰色に還元焼成されていた。また炉壁には鉄滓が付着していた。2号炉は直径約30cmで表面は赤褐色である。

遺物：比較的まとまった量の遺物が出土しているが、図化できたものはそれほど多くない。1～7は高坏である。1は椀形の坏部であり、口縁部は短く外反する。2～6は脚部で、円筒形に近い筒部から大きく裾が開く形をとっている。5の筒部中程には対抗する2か所に円形の穿孔が認められる。6は脚部を転用した羽口である。裾部には段が認められ、筒部上半は還元焼成され黒灰色に変色し発泡している。8は小型丸底土器であり、覆土中からの出土である。9、10は甕である。10は口頸部であり口縁は「く」の字に屈曲する。11、12は羽口である。いずれも先端部から半分程が還元焼成され、黒灰色に変色し発泡している。また12は先端を1号炉に向けた状態で出土している。この他に、覆土中より約400gの鉄滓が出土している。また、P6の脇からは表面に敲打痕があり、被熱を受けている金床石と考えられる石が出土している。

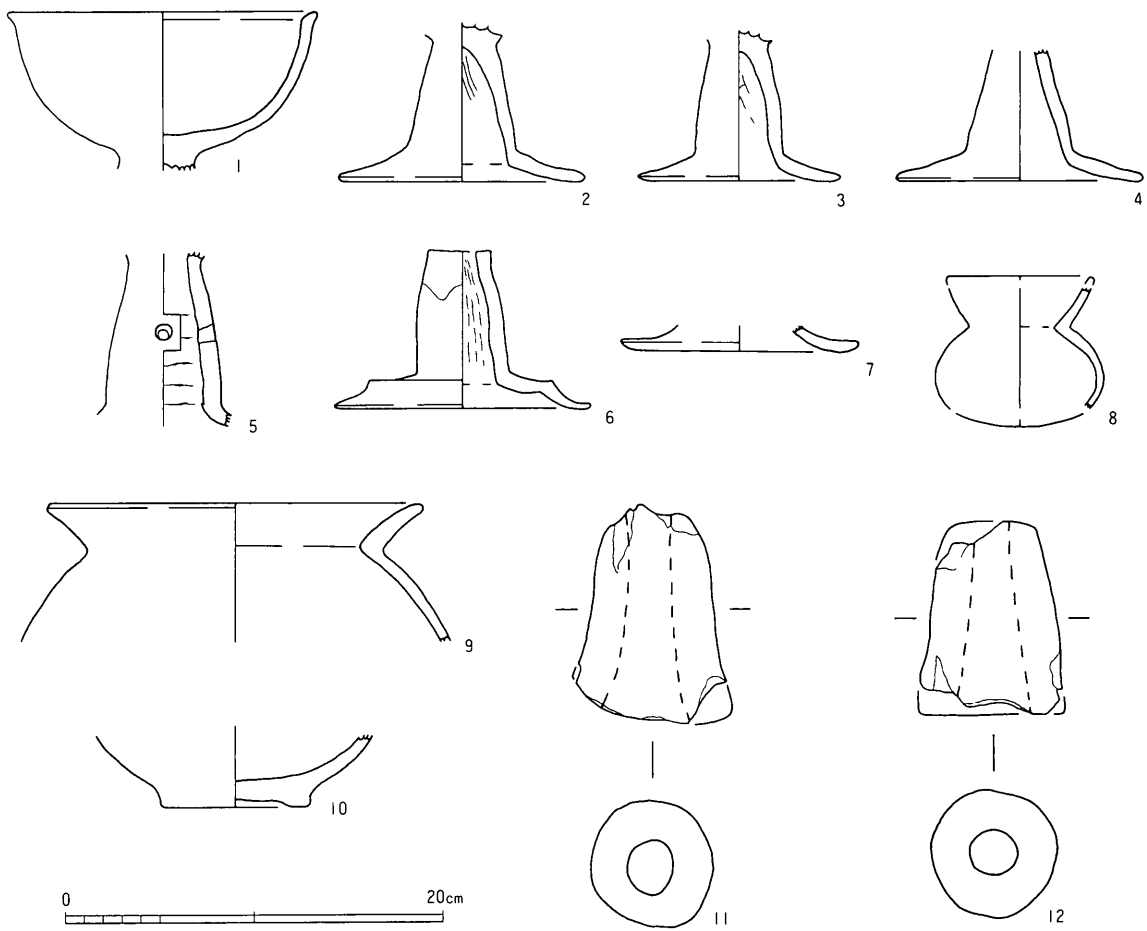
本住居跡は、1号住居跡と同様に鍛冶関連遺構である可能性が高いと考えられる住居跡である。出土遺物の中には椀形の杯部を持つ高杯があることから、5世紀中頃～後半にかけてと考えられる。



第7図 20号住居跡1号炉断面図



第8图 20号住居跡



第9图 20号住居跡出土遺物

22号住居跡 (第10図、図版5・8)

位置：DO・DP-44・45 規模：不明 平面形：方形

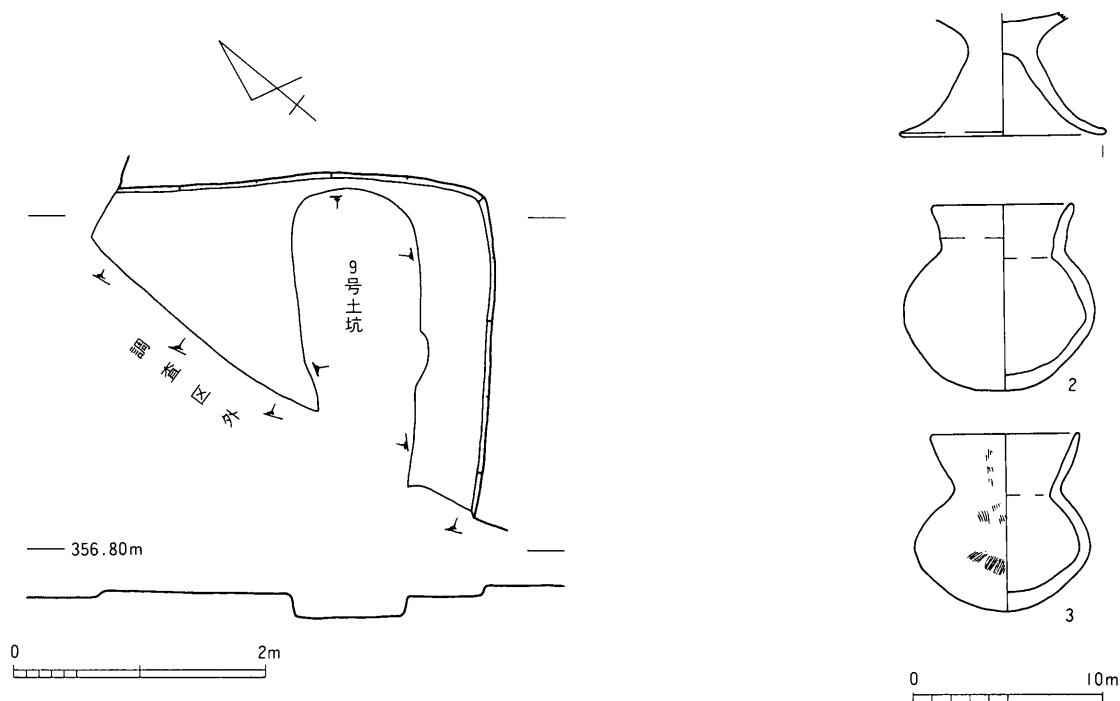
主軸方向：N-51°-E 新旧関係：18号住居跡、9号土坑に切られる。

床面：ほぼ平坦であったが、縮まりはなかった。

壁：壁高5cmを測るだけであり、残りは良くなかった。

遺物：出土量は少ない。1は高坏の脚部である。筒部は円筒形にならず、くびれ部から大きく裾が開く形となっている。2、3は小型丸底土器である。2は最大径を胴部中ほどに持ち、比較的短い口縁部となっている。3は最大径を口縁部に持ち、外面にはハケが認められる。

出土遺物から、本住居跡は5世紀前半～中頃と考えられる。



第10図 22号住居跡及び出土遺物

9号土坑 (第11図、図版5・12)

位置：DO-45 規模：1.10m×2.2m以上 平面形：長方形

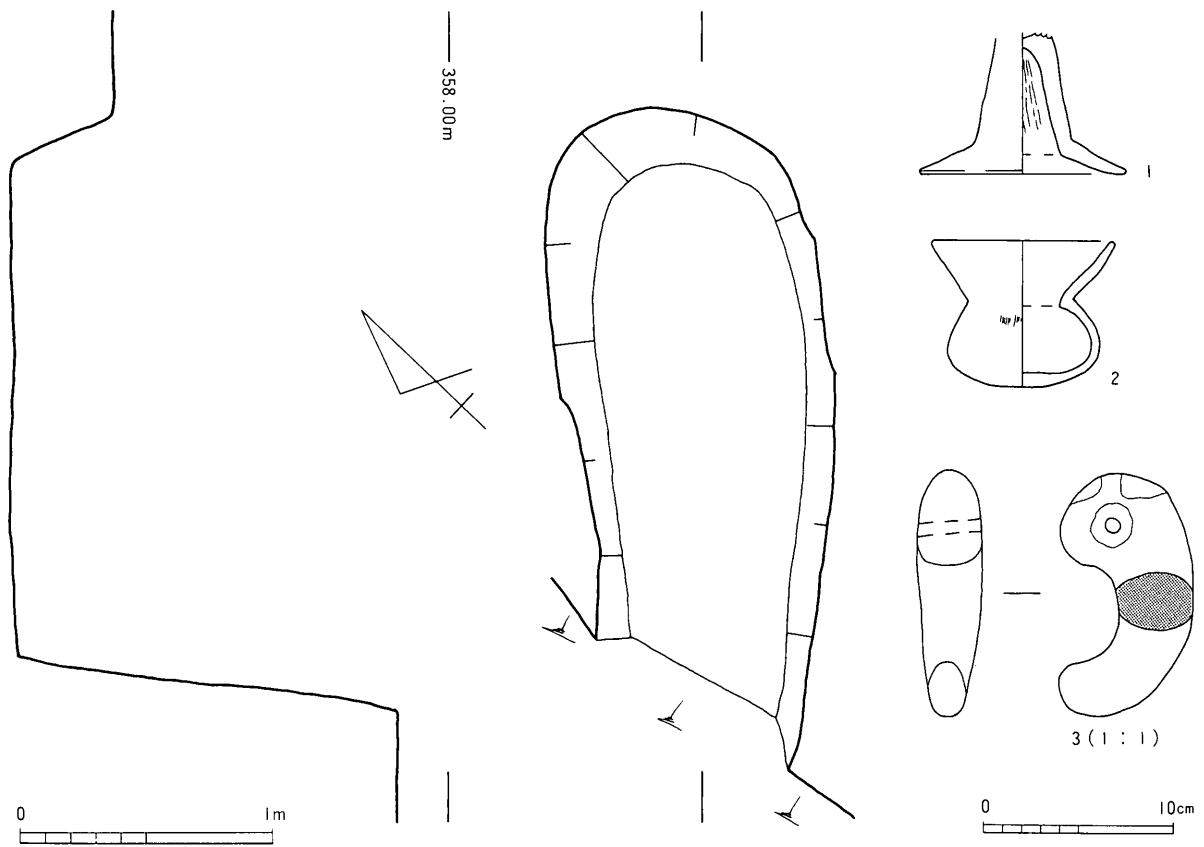
主軸方向：N-47°-E 新旧関係：22号住居跡を切る。

構造：検出面からの深さ最大50cmを測り、壁はやや斜めに掘り込まれている。南西側が調査区外になるため、溝状の構造をとる可能性もある。

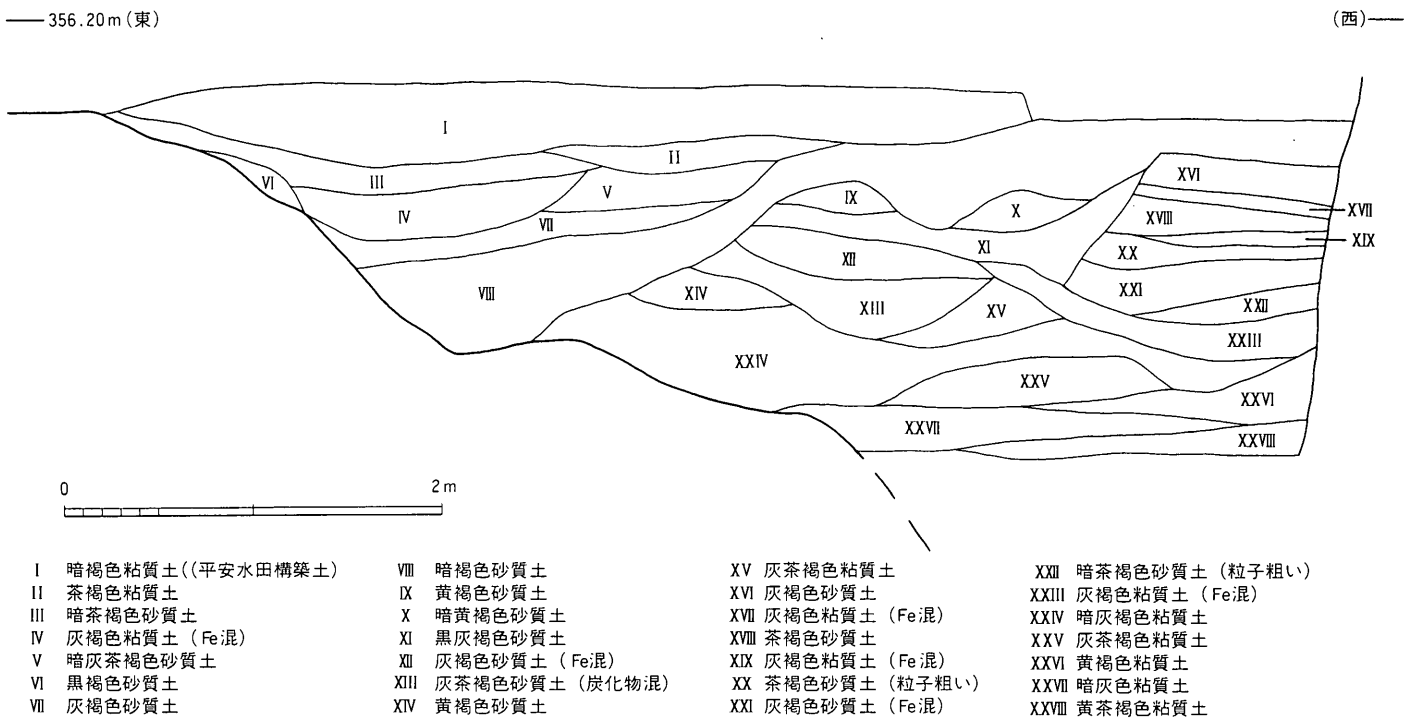
遺物：出土量はそれほど多くない。1は高坏の脚部である。いわゆる「屈折脚高坏」であり、筒部内面にはシボリ痕が認められる。2は小型丸底土器である。口頸部が比較的大きく広がり、外面にはわずかながらハケが認められる。3は石製勾玉である。色調は濃緑色を呈する。

出土遺物から5世紀前半と考えられる。





第11図 9号土坑及び出土遺物



第12図 10号溝断面図

10号溝 (第12・13図、図版11)

位置：AD～AP-5～15

規模：幅10m以上、深さ2.4m以上

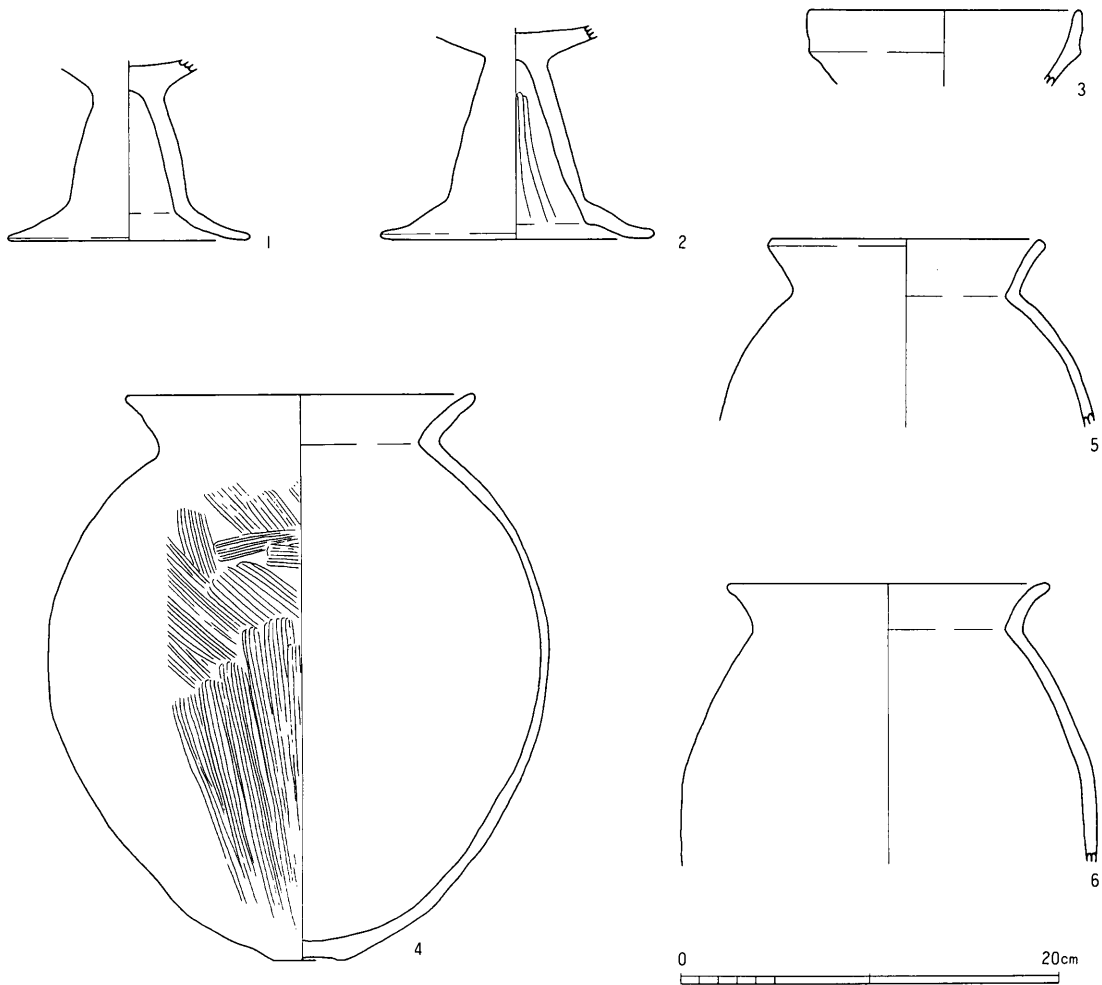
断面形：不定形

方向：N-15°-W

構造：検出面下約2.4mまで掘り下げたが、出水があり危険になったためこれ以上の掘り下げは断念した。覆土は砂質土と粘質土が交互に堆積している。東側には鉄分が厚く沈殿した凹地が溝に流れ込むように拵がっている。

遺物：覆土中より出土している。1、2は高坏である。いずれも円筒形に近い脚部を持つ「屈折脚高坏」であり、杯部内面は黒色処理されている。3は壺であり、口縁部に段が認められる。4～6は甕である。いずれも口頸部が「く」の字に屈曲し、3の外表面にはハケが認められる。

出土遺物は、5世紀前半～中頃にかけてのものと考えられるが、いずれも覆土中からの出土であり本遺構はすでにこの時期には機能の大半を喪失していたものと考えられる。



第13図 10号溝出土遺物

### 第3節 平安時代

2号住居跡 (第14・15図、図版5・9)

位置：BD～BF-25～27 規模：4.45m×4.10m 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-5°-W 新旧関係：3、12号住居跡、5、7号土坑を切る。

床面：ほぼ平坦であり、顕著で良く締まっていた。

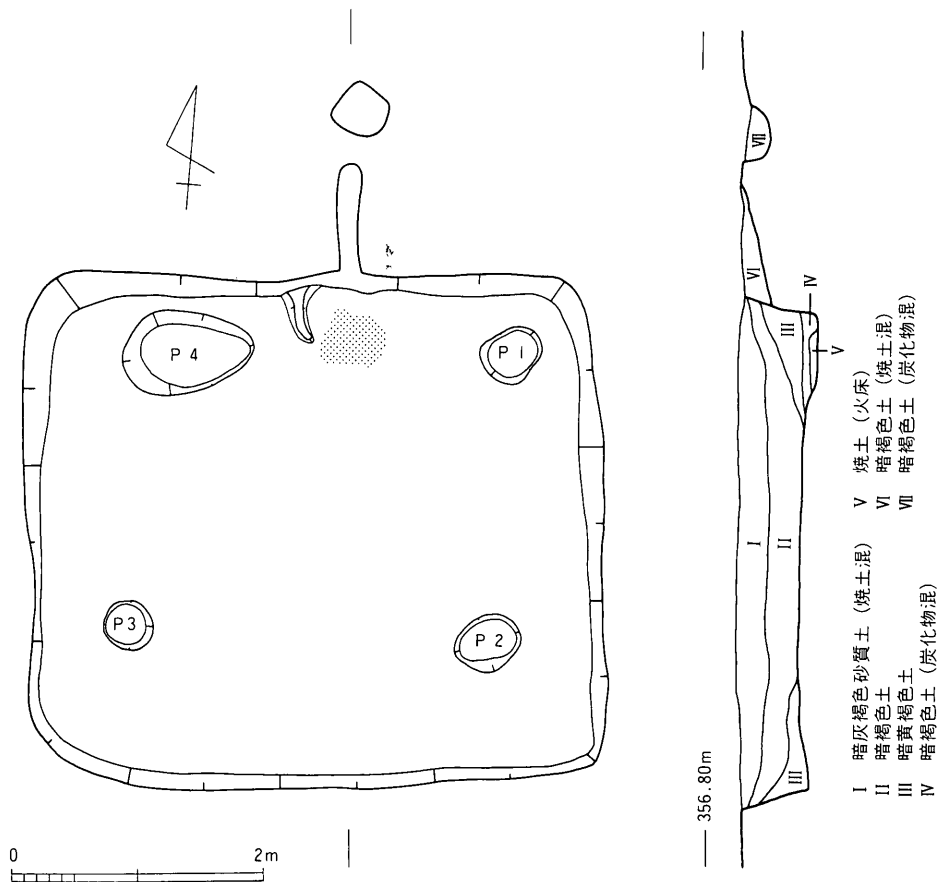
壁：立ち上がりには若干角度が認められるが、明確であった。最大壁高55cmを測る。

柱穴：P1～P4の4基検出した。いずれも主柱穴と考えられ、直径50cm前後である。

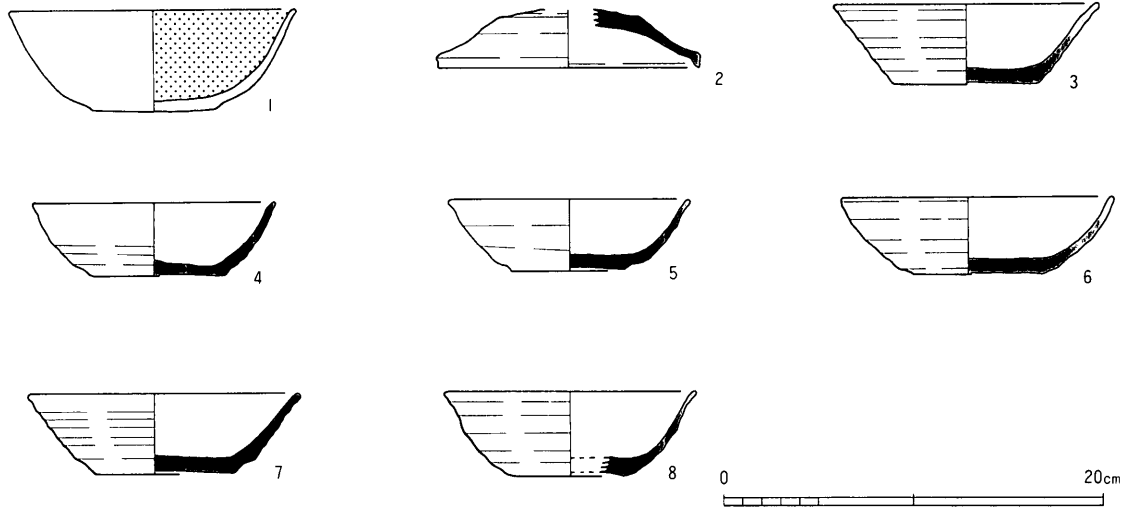
覆土：大別して3層に分けることができ、I層は「仁和の洪水砂」と考えられる砂層である。

カマド：煙道は比較的良く残っていたが、その他の残りは悪い。左袖が高さ10cm程度の高まりとして残っただけであり、右袖はまったく残っていなかった。

遺物：出土量はあるが、図化できた遺物はそれほど多くない。1は土師器坏である。内面黒色処理されていて、底部には回転糸切痕が残っている。2は須恵器坏蓋である。外面の1/4程度に回転ヘラケズリが認められ、残りはロクロナデである。3～7は須恵器坏である。いずれも底部には回転糸切痕が残っている。6の口縁は直線的であるが、それ以外は外反気味である。



第14図 2号住居跡



第15図 2号住居跡出土遺物

3号住居跡 (第16・17図、図版6・13)

位置：BD～BF-24、25

規模：4.25m×3.90m

平面形：隅丸方形

主軸方向：N-12°-W

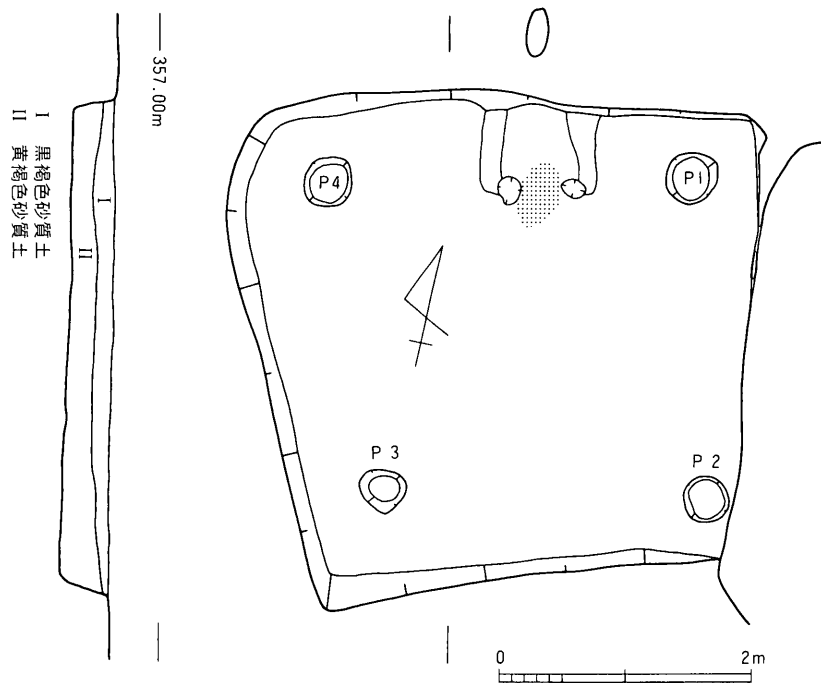
新旧関係：4、12号住居跡を切り、2号住居跡に切られる。

床面：ほぼ平坦であり、顕著で良く締まっていた。

壁：立ち上がりに若干角度が認められる。最大壁高40cmを測る。

柱穴：P1～P4の4基検出している。直径35～40cmを測り、主柱穴になるものと考えられる。

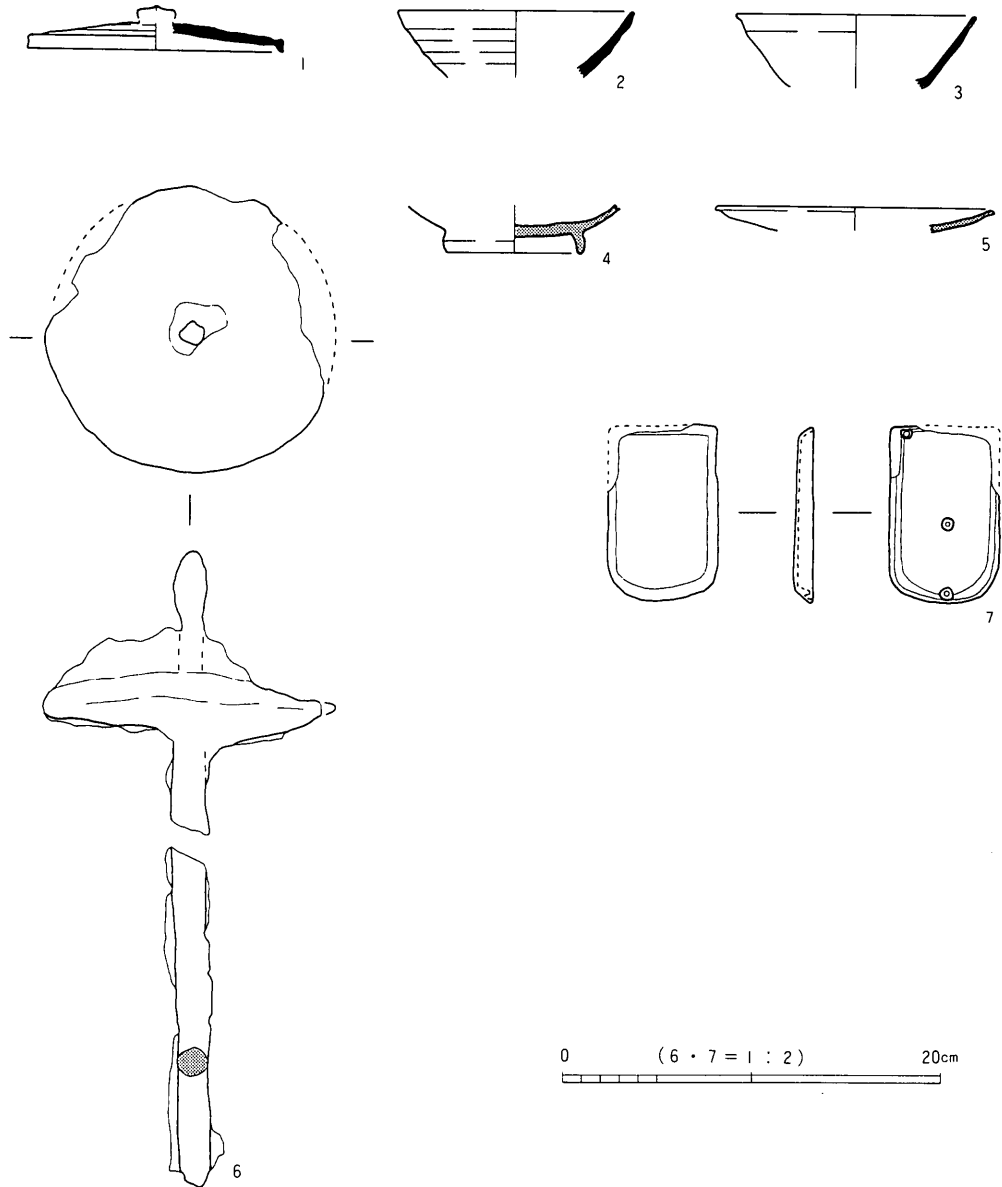
覆土：2層に分けることができ、II層は「仁和の洪水砂」と考えられる砂層である。



第16図 3号住居跡

カマド：北壁中央より検出している。袖はまったく残っておらず、黄褐色の帯状に痕跡が残っているだけであり、袖石も抜き取られていた。

遺物：出土量は多くない。1は須恵器坏蓋である。2、3は坏である。2は器厚がやや厚く、口縁は直線的であるのに対し、3の口縁は若干玉縁状に肥厚している。4、5は灰釉陶器である。6は鉄製の紡錘具であり、紡錘車の直径は8 cm程である。7は青銅製の帯金具鉞尾である。



第17図 3号住居跡出土遺物

12号住居跡（第18図、図版6・9）

位置：BC～BE-25、26

規模：3.85m×3.75m

平面形：隅丸方形

主軸方向：N-7°-W

新旧関係：4号住居跡を切り、2、3号住居跡に切られる。

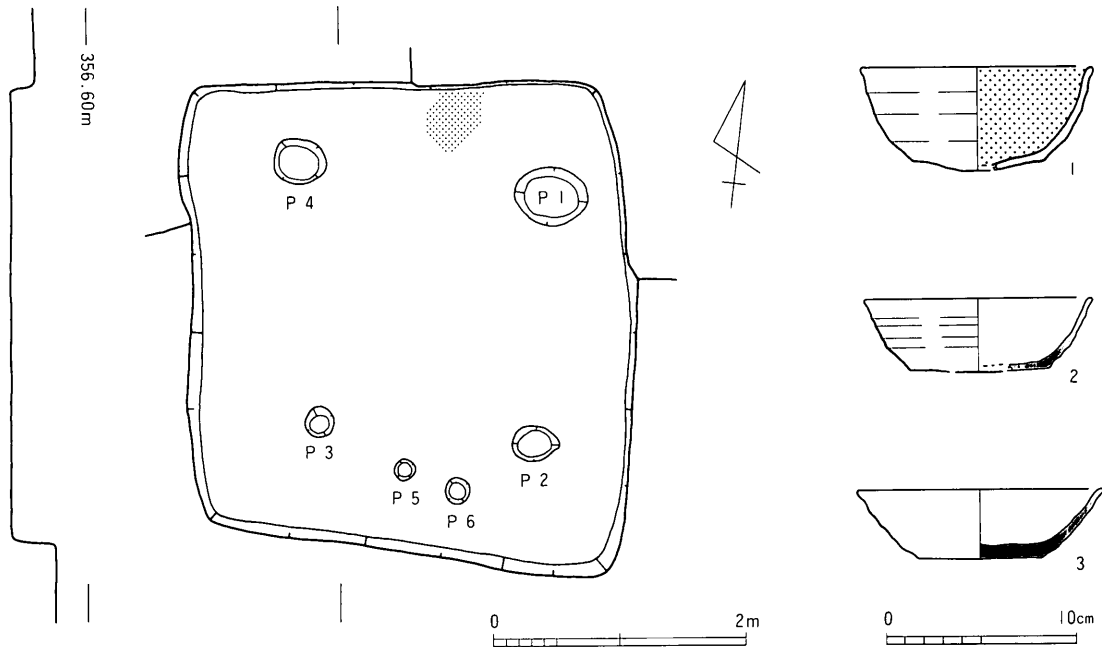
床面：ほぼ平坦であり、顕著で良く締まっていた。

壁：ほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高35cmを測る。

柱 穴：P 1～P 6 まで検出しており、P 1～P 4 は主柱穴と考えられる。

カマド：北壁やや東寄りの部分に、火床と考えられる焼土を検出しただけである。

遺 物：少なくとも4棟の住居跡が切り合っているため、確実に本住居跡に伴うと考えられる遺物は多くない。1は土師器坏である。内面黒色処理され、底部には回転糸切痕を残しているが、底部には凹凸が認められる。2、3は須恵器坏である。いずれも器厚がやや厚く、底部には回転糸切痕を残している。



第18図 12号住居跡及び出土遺物

16号住居跡 (第19・20図、図版6・10・13)

位 置：BA、BB-11~13 規 模：5.25m×4.30m 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-12°-E 新旧関係：15号住居跡に切られる。

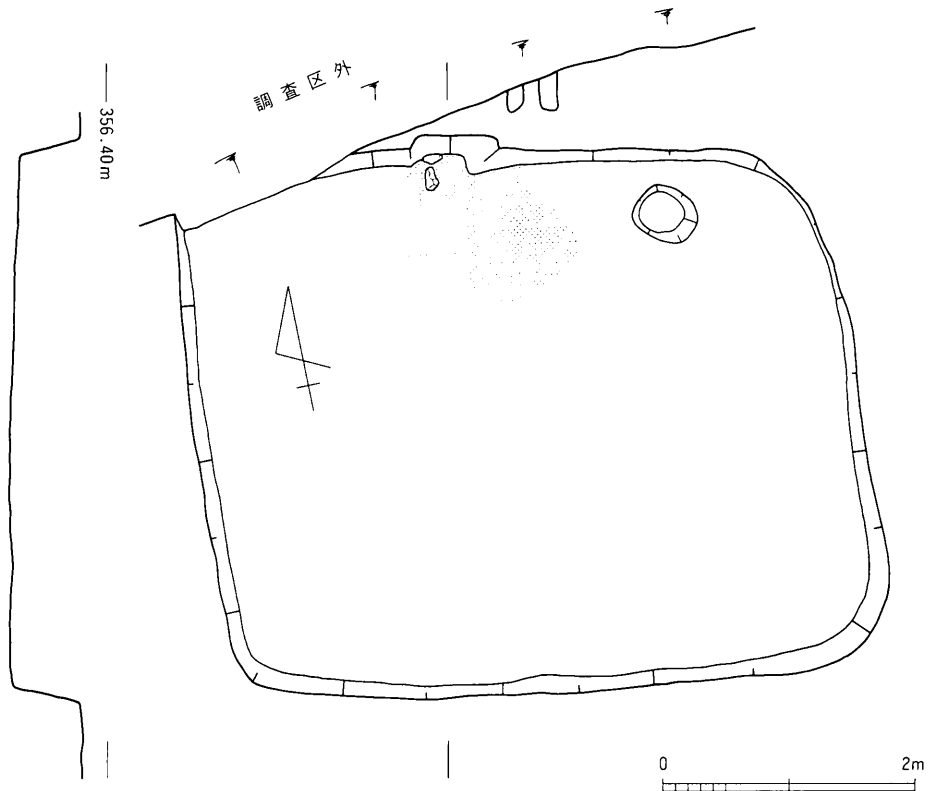
床 面：ほぼ平坦であり、顕著で良く締まっていた。

壁：立ち上がりには若干角度が認められ、最大壁高50cmを測る。

柱 穴：1基検出しているだけであり、他には検出することはできなかった。

カマド：北壁ほぼ中央と考えられる位置より検出している。袖はまったく検出することはできなかったが、壁が「コ」の字状に突出しており焼土化していたため、ここにカマドがあったものと考えられる。また、北側からは2本の煙道を検出しており、この煙道が本住居跡に伴うものとする、少なくとも2回の作り替えが行われた可能性がある。

遺 物：比較的まとまった量の遺物が出土しているが、甕類の出土量は非常に少なく、図化できたものはなかった。1～3は土師器坏である。内面黒色処理され、1、2の底部には回転糸切痕が残っている。3には非常にシャープな高台がつけられている。4～6は須恵器坏である。7、8は須恵器皿である。胎土、焼成は灰釉陶器に非常に良く似ているが、釉はかけられていない。9は灰釉陶器碗である。10は突帯付四耳壺、11は壺の底部である。12、13は鉄製品であるが用途は不明である。



第19図 16号住居跡

**18号住居跡**（第21・22図、図版7・9）

**位置**：DP、DQ-44、45      **規模**：不明      **平面形**：隅丸方形

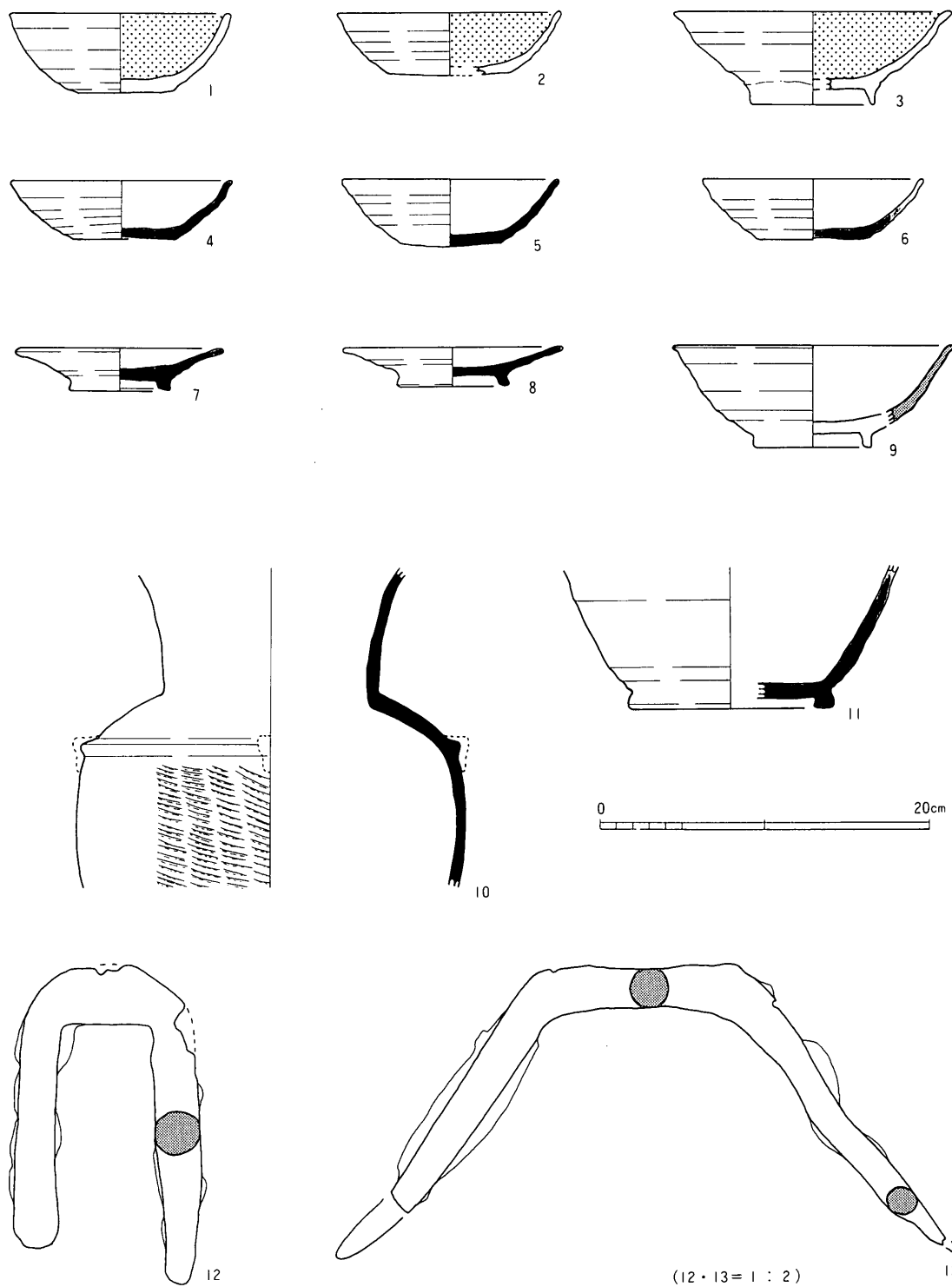
**主軸方向**：N-15°-W      **新旧関係**：19、22号住居跡を切る。

**床面**：ほぼ平坦であり、顕著で良く締まっていた。

**壁**：北、西側が調査区外になり、全体の¼程を検出しただけである。立ち上がりには若干角度が認められ、最大壁高45cmを測る。

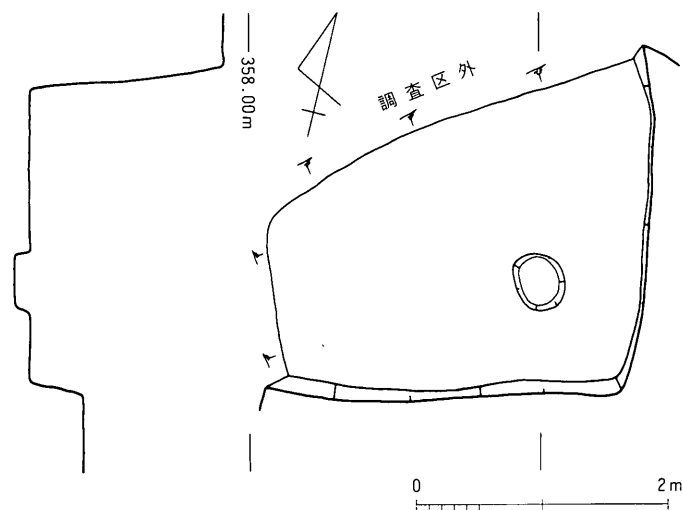
**柱穴**：1基検出しているが、掘り込みは10cmと浅く支柱穴になるとは考えられない。

**遺物**：出土量は少ない。1、2は土師器坏である。いずれも内面黒色処理されている。1の口縁は直線的に立ち上がるが、2の口縁には段が認められる。また2の底部には回転糸切痕が残っており、高台が剥離した痕跡も残っている。3、4は須恵器坏である。いずれも焼成の甘い軟質須恵器であり底部には回転糸切痕が残っている。5は砥石である。4面とも研磨痕が認められる。この他に凸帯付四耳壺の破片なども出土しているが、図化し得なかった。

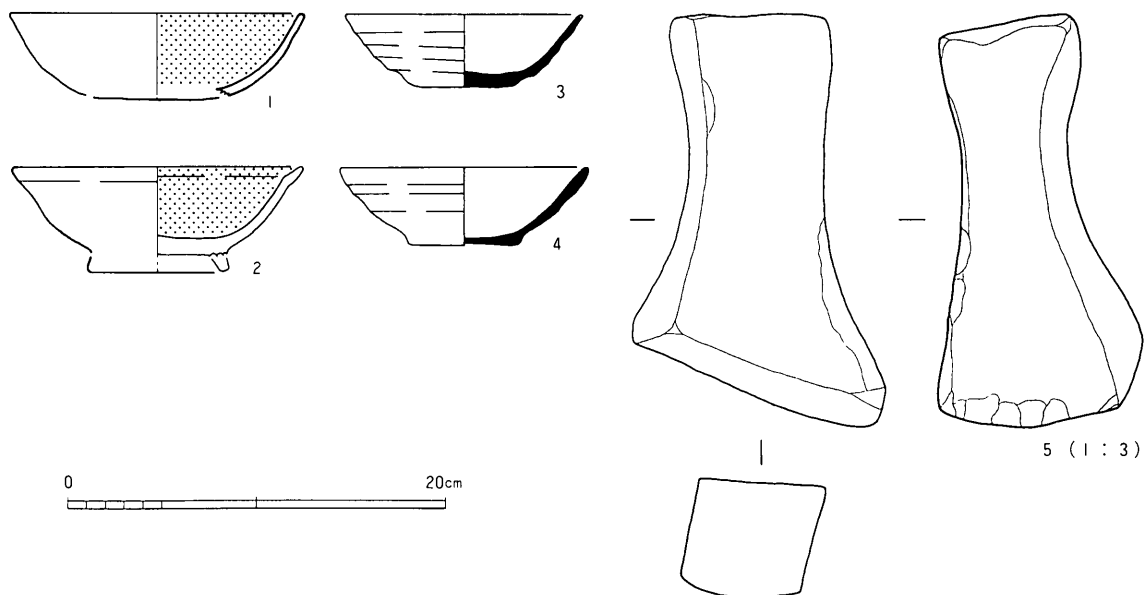


第20図 16号住居跡出土遺物





第21図 18号住居跡



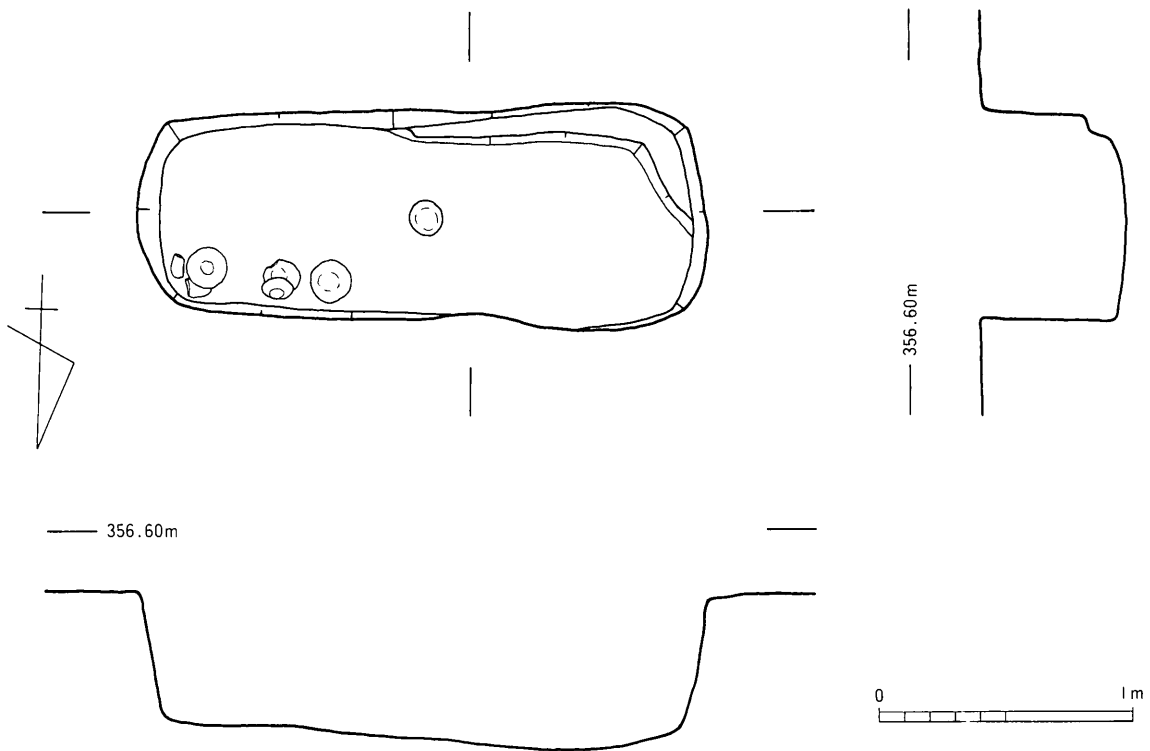
第22図 18号住居跡出土遺物

**2号土坑 (第23・24図、図版7・12)**

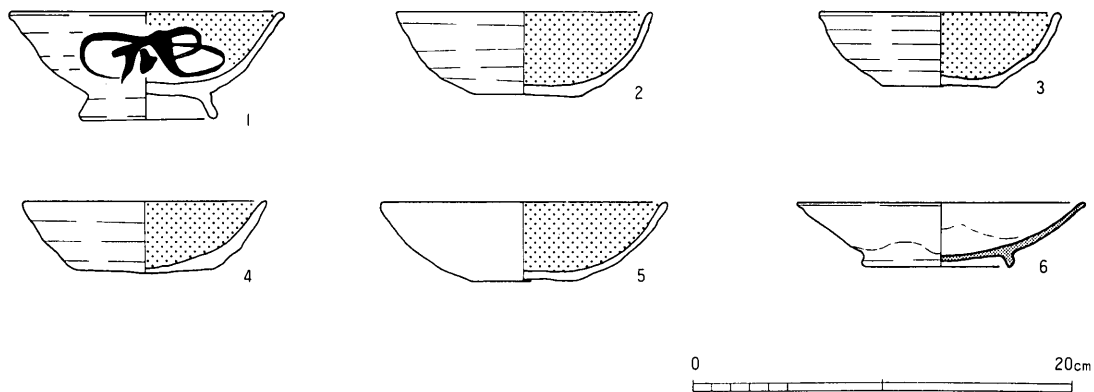
**位置:** A F-11、12      **規模:** 2.10m×0.85m      **平面形:** 隅丸長方形  
**主軸方向:** N-88°-E      **新旧関係:** なし

**構造:** 検出面からの深さ最大60cmを測り、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。南壁から西壁にかけて底から10cm程の高さに段が認められる。底部は西から東に向かって緩やかに上がっている。東壁から約30cmのところに頭蓋骨の一部と歯が残存していた。平面形がかなり整った長方形をしており、また南壁から西壁にかけて認められるテラス状の段がほぼ直角に屈曲することなどから、本遺構は木棺墓であった可能性を指摘できる。また、土坑の規模、頭蓋骨の出土位置から頭部を東に向けた伸展葬であると考えられる。覆土は「仁和の洪水砂」と考えられる砂質土の単一土層であった。

遺物：図示した6点が出土した。いずれも完形に近いものであり、1点を除いて北東隅から出土している。また図示した以外の遺物の出土はごくわずかである。1～5は土師器杯である。いずれも土坑内北東隅から出土したものである。1は内面黒色処理され、比較的足の長い高台が付く。底部には回転糸切痕を残す。外面には墨書が認められるが判読不能である。梵字あるいは吉祥句のようなものであろうか。3は2の上に、また5は4の上にそれぞれ蓋を被せるような状態で出土している。いずれも内面黒色処理され、底部には回転糸切痕を残している。6は土坑内ほぼ中央、遺体の腹部から股間に当たる位置から出土した灰釉陶器皿である。高台は比較的シャープで、口縁部は玉縁状に肥厚している。釉は付け掛けである。



第23図 2号土坑



第24図 2号土坑出土遺物

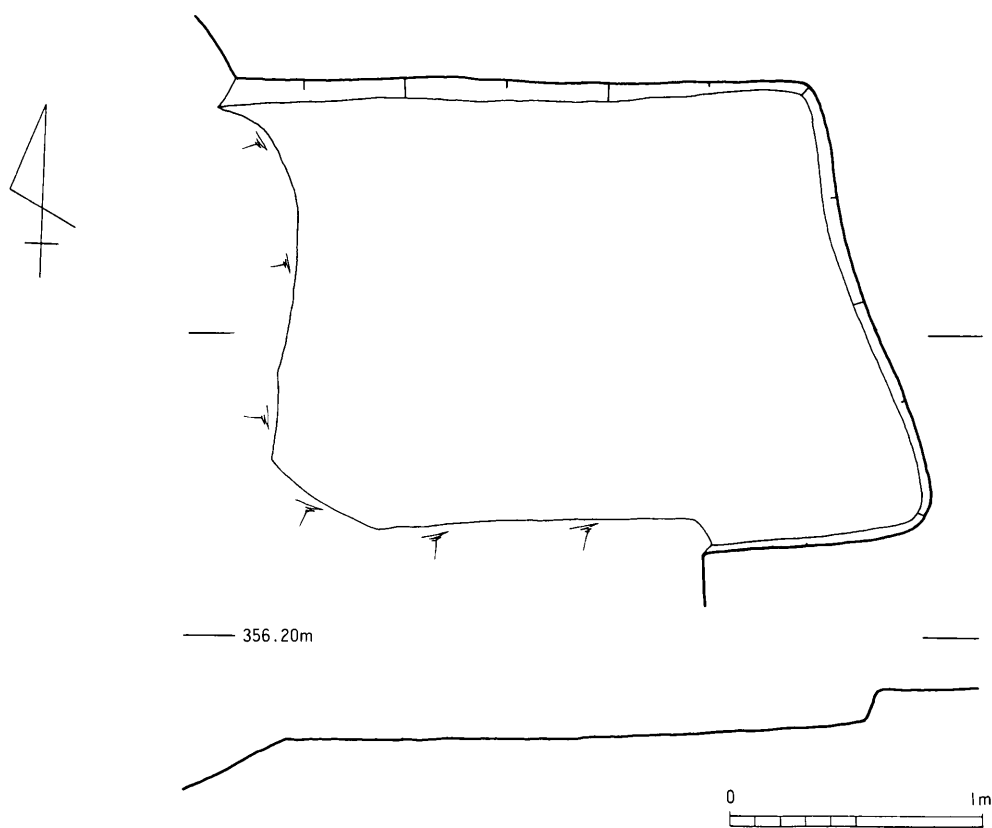
8号土坑 (第25・26図、図版12)

位置：AY、AZ-8      規模：1.85m×2.4m以上      平面形：長方形

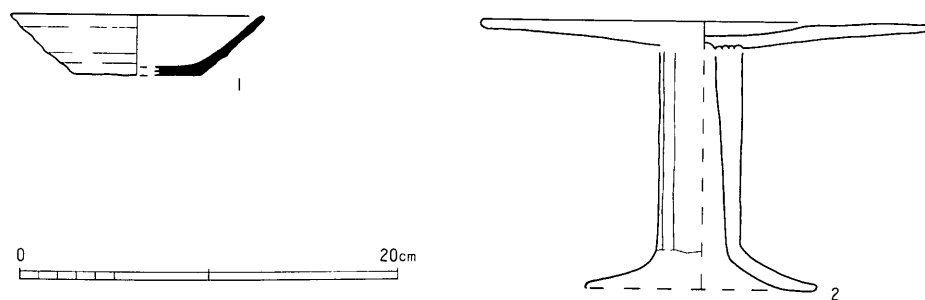
主軸方向：N-2°-W      新旧関係：平安水田面に切られる。

構造：壁はやや角度を持って立ち上がり、最大壁高15cmを測る。西側及び南側は平安水田面によって削平されている。

遺物：出土量は少ない。1は須恵器杯で器厚はやや厚く、底部には回転糸切痕を残している。2は土師器高杯である。杯部は平坦で、裏面中央には六角形の剝離痕が認められるため、脚部を面取りした高杯であると考えられる。色調は灰白色を呈し、肉眼観察ではあるが在地の土師器とは明らかに異なった胎土をしている。



第25図 8号土坑



第26図 8号土坑出土遺物

1号溝 (第27・28図、図版11)

位置：A I ~ B J - 12 ~ 18

規模：最大幅10m

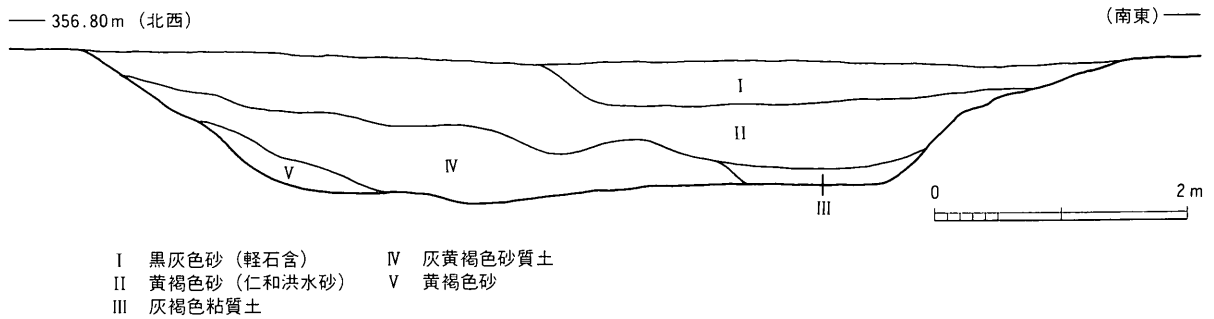
平面形：曲線

方向：南 ~ 北北東

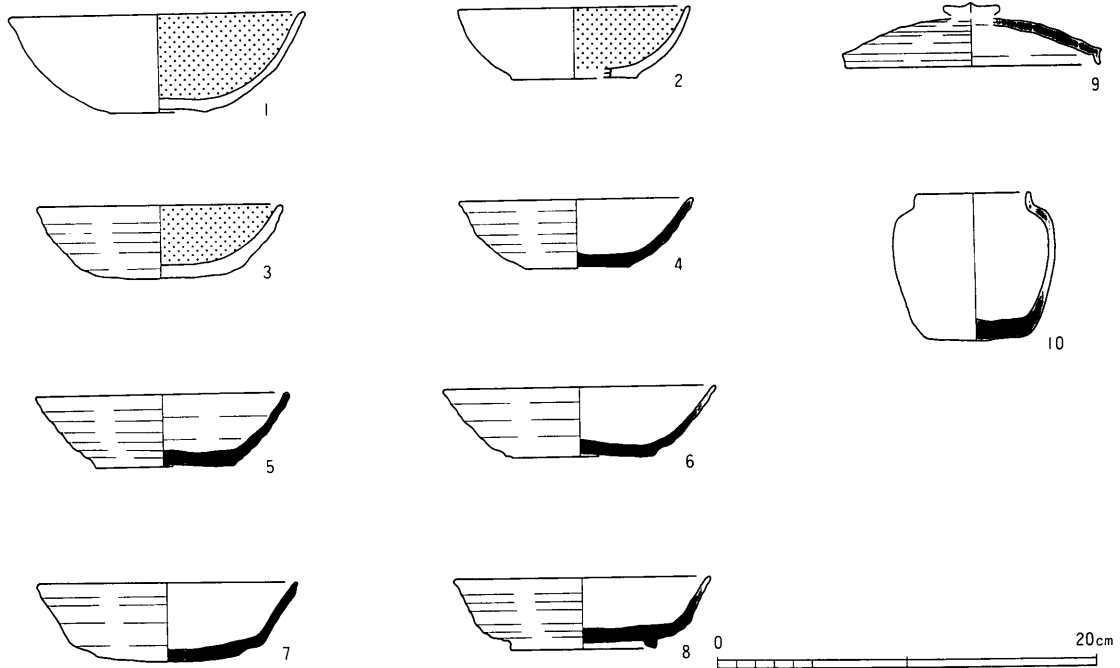
新旧関係：関係するすべての遺構を切る。

構造：断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さ最大1.2mを測る。覆土は砂質土であり、II層は「仁和の洪水砂」と考えられる。延長55m程を検出したが、調査を行っていない部分も含めると75m程になる。底部の標高は、南端で355.45m、北端で355.30mを測り、南から北に向かって緩やかに傾斜している。底面には鉄分が付着しており、水が流れていたものと考えられる。

遺物：比較的まとまった量の遺物が出土しているが、図化できたものはそれほど多くない。1 ~ 3は土師器坏であり、いずれも内面黒色処理されている。2の底部には回転糸切痕が残っている。これに対し、3の底部にはナデが施されている。4 ~ 8は須恵器坏である。4 ~ 6は口縁が直線的に立ち上がり、底部には回転糸切痕を残している。これに対し、7の底部はへら切り後未調整のままである。10は小型壺であるが焼歪みが激しい。



第27図 1号溝断面図



第28図 1号溝出土遺物

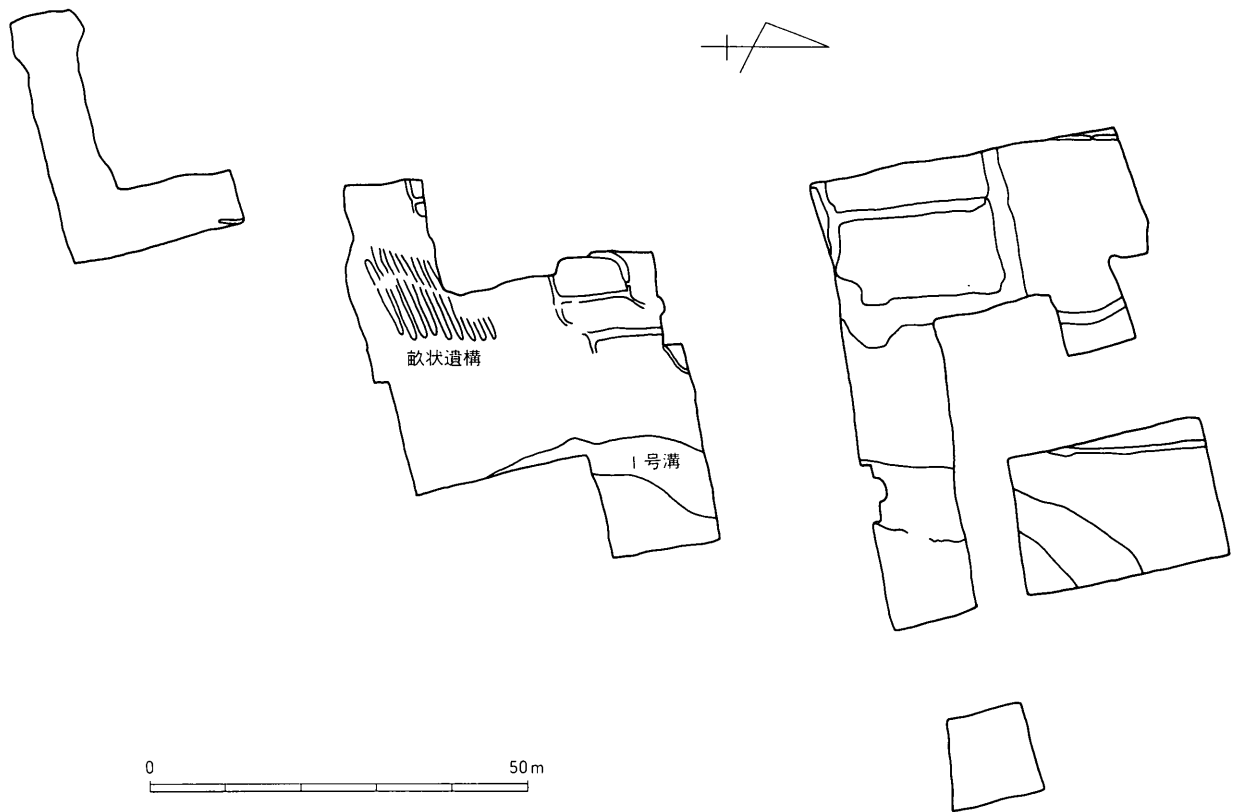
水田面（第29図、図版7）

1号溝の西側ほぼ全面より検出した。特に北校舎地区からは、下底幅2mを超える東西方向の大畦畔を検出している。この東西方向の大畦畔はN-100°-W前後の走向を持ち、これに直交するように南北方向に畦畔が伸びている。しかしながら東西方向の大畦畔は、この延長上に当たる武道場地区からは検出していない。

9区から6区にかけて地形が大きく下がり、検出した水田面の標高は354.9m前後を測る。これは1号溝の河床よりも低位にあたる。このため、この水田面から1号溝への排水は不可能であると考えられる。また、取水路と考えられるような施設も検出していない。北校舎地区については出水があったため水田面の下層の調査を十分に行うことができなかったが、南校舎地区ではこの水田面の下層から古墳時代の流路と考えられる10号溝を検出している。今回検出した水田面は、この10号溝が埋没した低湿地に水田が開田された可能性が考えられる。

水田の区画は長方形を基本としているものの、その規模にはかなりバラつきが認められる。北校舎地区から検出したものは20m×10mほどの規模を持つが、南校舎地区から検出したものは10m×5mほどである。

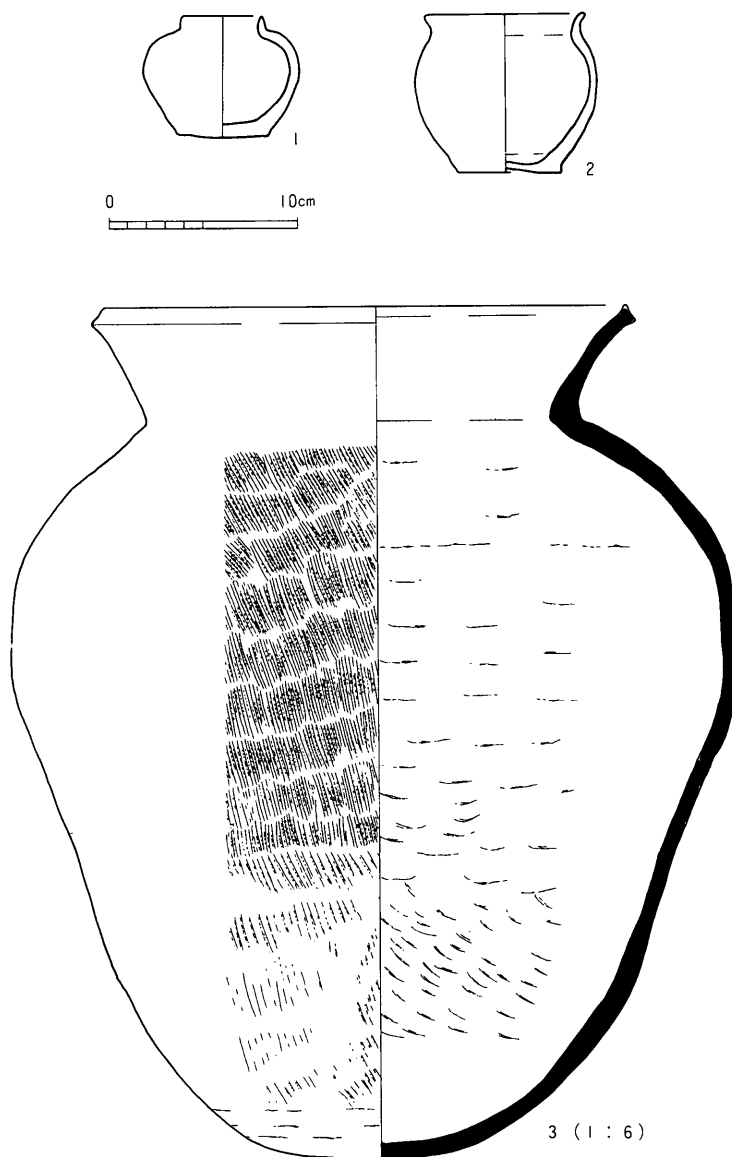
また、南校舎地区南半部からは、基底部幅1m程度で断面がかまぼこ形となる畝状の高まりを9条検出した。この付近は水田面に比べて地形が1段上がっており、検出面の高さは1号溝の検出面とほぼ同じである。下層には10号溝があるため、これが人為的な微高地であるのか自然のものであるかは不明である。畝として利用されていたものと考えられるが、畝状遺構を構成している土は、肉眼観察ではあるが水田構築土と同一のものである。



第29図 畦畔位置図

その他の遺物 (第30図、図版12)

1、2は共にBN-17グリッドより出土したものである。「仁和の洪水砂」の直下より2点並べられたようにして出土しているが、掘り込み等の施設は検出していない。1は土師器壺であり、須恵器有蓋小壺を模倣したものと考えられる。丁寧な作りであるがヘラミガキは認められない。2は小型の甕である。底部には回転糸切痕を残して、内外面ともロクロナデによって成形されている。3はBA-8グリッドより出土した須恵器大甕である。砂層中より出土したもので、重機掘削の際に気付かずに破壊してしまったが、口縁部を除きほぼ完存する。胴部外面には平行タタキが施されているが上半部と下半部では原体の大きさに違いが認められる。また内面には同心円状の当具痕が認められるが、ナデ消されている。口径40.6cm、器高66.8cmを測る。



第30図 その他の遺物

# 第5章 まとめ

屋代遺跡群はこれまでに大小あわせて何次もの発掘調査が行われ、検出された遺構、遺物は膨大な量となっている。近年の上信越自動車道、国道403号線土口バイパス建設に伴う発掘調査などでは、大型掘立柱建物跡の検出や国府、郡府木簡、唐三彩など特殊な遺物の出土があり、周辺に官衙が存在していた可能性が指摘されている。

今回調査を行った大塚遺跡では官衙に直接関連すると考えられる遺構、遺物の検出はなかったが、足かけ3か年にわたる市内でも大規模な調査によって、いくつかの新たな知見を得ることができた。以下、今回の調査で注目された点についてふれ、まとめとしたい。

## 1 古墳時代の鍛冶関連遺構について

部室地区を中心として古墳時代中期の住居跡を検出している。このうち1、20号住居跡より鍛冶関連遺物が出土した。遺物は羽口、鉄滓などであり製品は出土していない。また、20号住居跡からは金床石も出土している。遺構としては、両住居跡より鉄滓の付着した地床炉を検出している。

このうち20号住居跡は南側の一部が後世の攪乱により破壊されているが、その全容を明らかにすることができた。その特長は、一辺が約3.2mほどであり比較的小型の住居であること、明らかに支柱穴と考えられるピットが検出されていないことが上げられる。出土遺物には専用羽口2点の他に、高坏の脚部を転用した羽口が1点出土している。また、高坏の脚部、特に筒部の出土量は坏部の出土量に比べて多く、図化し得なかったものも含めて少なくとも10個体分以上が出土している。高坏の脚部(筒部)が集中して出土していることは、羽口に転用するために意図的に収集した可能性が考えられる。専用羽口のうち1点は1号炉内に先端を向けた状態で出土しており、使用状態のまま住居が廃絶した可能性がある。鉄滓の出土量は約400gと比較的少なく、鍛錬鍛冶を中心に行われていたものと考えられる。

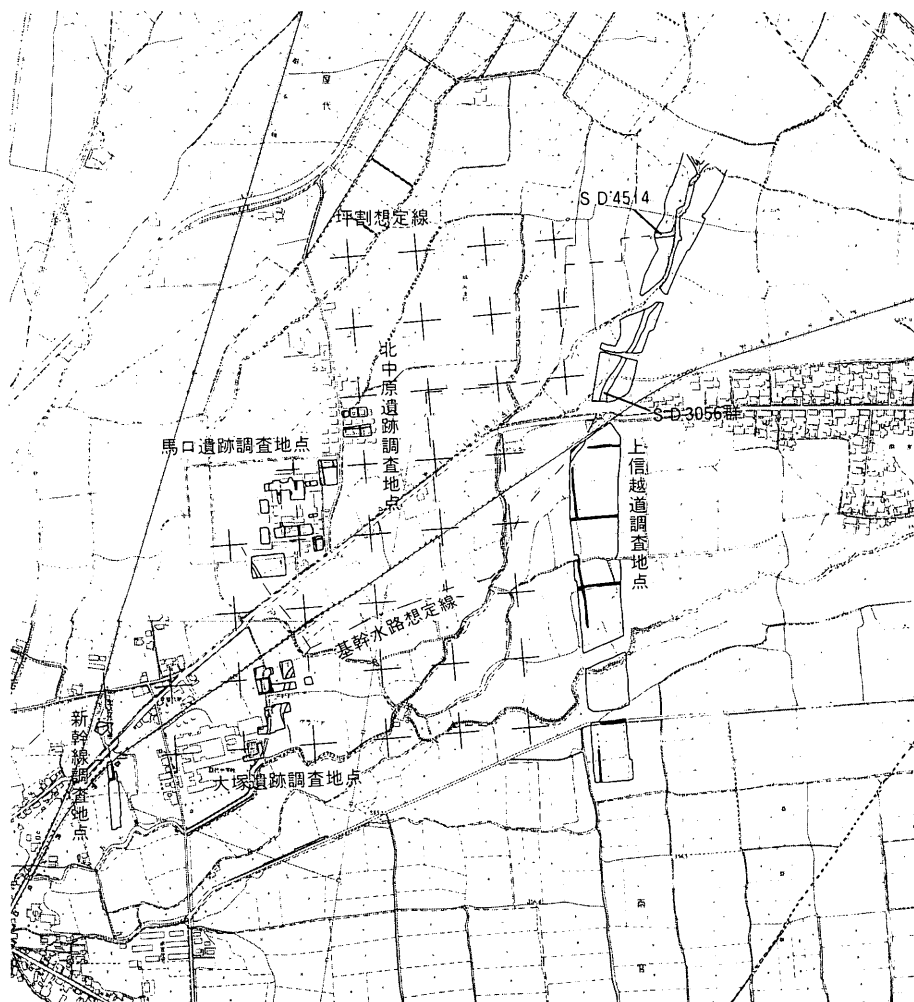
次に、これら鍛冶関連遺構の所属時期について考えてみたい。1号住居跡からは小型丸底土器に酷似した平底の壺と共に比較的筒部の長い屈折脚高坏が出土している。また20号住居跡からは椀形の坏部を持つ高坏や、1号住居跡出土のものに比して筒部がやや短い屈折脚高坏が出土している。小型丸底土器も出土しているが、覆土中からの出土であり、完形に復原できるものではない。これらのことから1号住居跡は5世紀前半、20号住居跡は1号住居跡よりも後出するものと考えられる。

これまでのところ長野県内において鍛冶関連遺構、遺物の最古例は長野市石川条里遺跡より出土した羽口であり、4世紀後半～5世紀初頭と考えられている。古墳時代の鍛冶関連遺構としては、この他に長野市榎田遺跡、佐久市市道遺跡、茅野市家下遺跡、飯田市北田遺跡など数例が知られているだけであり、石川条里遺跡を除いてはいずれも後期に属するものと考えられている。本遺跡から検出した遺構は、科学的な分析を行っていないが鍛冶遺構である可能性が極めて高いものであると考えられ鍛冶関連遺構、遺物があわせて検出された最古の例と言うことができるだろう。言うまでもなく、屋代遺跡群周辺は森將軍塚古墳を始めとして前期の大型前方後円墳が築かれた地域であり、これら権力者の力を背景として鉄生産が行われた可能性が指摘できるだろう。

## 2 平安時代前期の土地利用について

今回の調査では平安時代の流路（1号溝）を境として東側に集落、西側に水田が広がっている状況を検出することができた。特に水田跡からは幅2mを超える大型の畦畔を検出している。畦畔の走向はN-100°-W前後を測り、周辺の調査で検出されている条里畦畔の走向にほぼ一致する。第31図に周辺の調査で検出された畦畔とそこから推定される坪割図を載せた。<sup>註1</sup> これを見ると北校舎地区で検出した東西方向の大畦畔は、坪割想定線に一致してることがわかる。しかしながら、この坪割の東延長と、馬口遺跡で検出された南北方向の大畦畔が交叉すると考えられる相談室地区からは畦畔の検出はなく、集落跡を検出している。大塚遺跡周辺では、地表面に表れた条里的地割に乱れがあることが指摘されており、また更埴条里水田址内は全面に水田面が検出されるのではなく「島状の微高地」に集落が形成されていたとの指摘がある。相談室地区から検出した集落跡は、この微高地の一端をあらわにした可能性がある。

大塚遺跡より検出した水田跡は、その下層に古墳時代の流路が存在する可能性が高く、この流路が埋没した低湿地に水田が開田されたものと考えられる。このような状況は新幹線調査地点でも確認されていて、両者の水田跡は一連の遺構である可能性がある。これらの低湿地に開田された水田の区画



第31図 調査地周辺図（地図昭和38年9月 1:12,000）



は条里の坪割を基本として行われていると考えられる。しかしながら水田個々の区画は条里的な地割を行っているようには見受けられない。南校舎地区より検出した水田跡は長方形を基本としているものの、その規模は10m×5mほどと小さく、さらに小さい区画を持った水田跡が存在している可能性もある。新幹線調査地点では、坪を南北に半折する位置より東西方向の畦畔が検出されているが、この畦畔は坪を画すると考えられる畦畔を越えて東側には延びていない。これは流路が埋没した帯状の低湿地に開田されたという地形的な制約から来るものと考えられる。これらの低湿地上に形成された水田跡は、その基本的な地割が条里の坪割を基準としていること、水田跡の上部を覆う砂層がいわゆる「仁和の洪水砂」であると考えられることから、条里水田が開田された時期とほぼ時を同じくして開田されたものと考えられる。条里水田の開田時期は9世紀前半と考えられていることから、これら低湿地上の水田跡の開田時期についても9世紀前半であると考えられる。

条里水田の水利形態について見てみたい。これまでの調査では、水田の区画毎の配水は水路を伴わない畦越し配水が中心であるとの結果が得られているが、条里水田へ直接水を送る主要水路はあまり検出されていない。主要水路の可能性のある遺構としては、本調査により検出した1号溝、馬口II遺跡1号溝、上信越自動車道調査地点S D 3056群、同S D 4514などがある。上信越自動車道の調査によると、これらの溝は古墳時代から続く水路を踏襲しているもの、条里水田開田に合わせて新たに掘削されたものの2種類に大別されるとされ、前者にはS D 3056群が、後者にはS D 4514が該当するとしている。両者の遺構の特長は、前者は条里地割とは無関係に北東方向に流下しているのに対し、後者は調査部分がわずかであるため断定はできないが、坪境に相当する位置をほぼ東西に流れ、条里の交点付近でほぼ直角に向きを変え、北流しているように見受けられる。当然のことかも知れないが、条里制施行に伴って掘削されたと考えられる主要水路は、条里地割に沿って流下している可能性が高いと考えられる。

今回検出した1号溝はどうであろうか。規模、構造などはS D 4514によく似ている。また下層からは古墳時代と考えられるような遺構は検出していない。しかしその検出位置、走向は条里地割とは無関係のように見受けられる。このことは馬口II遺跡1号溝でも同様である。覆土中には「仁和の洪水砂」と考えられる砂層が厚く堆積しているため、この溝が埋没した時期は条里水田が埋没した時と同じであると考えていいだろう。では掘削された時期はいつであろうか。北校舎地区で1号溝の西側に接するように検出した16号住居跡は、出土遺物から9世紀前半代と考えられる。この16号住居跡は水田土壌の下層より検出したもので、明らかに1号溝より先行するものである。つまり1号溝が掘削された時期は9世紀前半を上回ることはなく、これは条里制施行に伴って掘削された主要水路であった可能性が指摘できるだろう。先述したように、大塚遺跡周辺では地表面に現れた条里的地割に乱れがあることが指摘されている。ほ場整備前の地図を見ると、長野電鉄河東線と現国道403号線の交差付近から南西に向かって、旧河道状に帯状の水田区画が存在していることが読み取れる。この帯状の水田区画はS D 3056群と一致するため、この部分に主要水路が存在していた可能性が指摘できる。この帯状の区画は向きをやや西寄りに変え、長野電鉄線に平行するような形で大塚遺跡周辺まで到達するものと、<sup>註2</sup> 南西方向のまま五十里川周辺の旧河道状地形に到達するものに分れているように見受けられる。このことから、大塚遺跡1号溝は条里制施行に伴い新たに掘削された主要水路ではあるが、古墳時代から続く従前の水路にも配水を行う目的で、条里地割とは一見無関係に思える位置に水路が掘削された可能性を指摘しておきたい。また、条里制施行に伴い掘削されたと考えられる主要水路は、

従前の水路に合流する手前で分岐し、坪境上を3坪分北流した後直角に東の向きを変え、やはり坪境上を2坪分東流し、その後数回直角に向きを変えながらS D4514に到達していく可能性がある。<sup>註3</sup>

なお、今回推定した主要水路の位置はあくまで、ほ場整備前の旧地形図から読み取ったものであり、今後の周辺の調査の進展によっては、まったく別の位置から主要水路が検出される可能性も否定できない。

最後に今回の調査に当たり、関係の皆さんの御協力に対し深く感謝申し上げ、まとめとします。

#### 註

- 1 第31図に示した坪割想定線は馬口遺跡、北中原遺跡、上信越自動車道調査地点の成果より導き出したものであり、1961～1964年にかけて行われた総合学術調査の坪割図とは相違している部分がある。また、馬口遺跡以西、北中原遺跡以北の坪割想定線は上記により得られた坪割を延長しただけのものであり、これらの地点まで条里地割が及んでいたことを示すものではない。
- 2 昭和38年の地形図では判然としないが、昭和35年の地形図には大塚遺跡周辺から東北東方向に延び、そこから北上する旧河道状の水田区画が見てとれる。
- 3 1980年に行われた大境遺跡の試掘調査でも、ほぼ東西方向の向きを持つ流路を検出している。詳細な位置を特定することはできないが、上信越自動車道調査地点で検出されたS D4514よりも50m程度南側に相当する地点から検出されている。

#### 参考文献

- |                 |   |       |
|-----------------|---|-------|
| 岡田正彦            | 『考古学上よりみたる長野県下の精練・鍛冶関連遺跡』<br>『長野県考古学会誌65・66号』 | 1992年 |
| 長野県教育委員会        | 『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』                          | 1968年 |
| (財)長野県埋蔵文化財センター | 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡』              | 1997年 |
| (財)長野県埋蔵文化財センター | 『上信越自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書25<br>更埴条里遺跡・屋代遺跡群』    | 1998年 |
| 長野県埋蔵文化財センター    | 『上信越自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書26<br>更埴条里遺跡・屋代遺跡群』    | 1999年 |
| (財)長野県埋蔵文化財センター | 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書3<br>更埴条里遺跡・屋代遺跡群』          | 1998年 |
| 長野県埋蔵文化財センター    | 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 榎田遺跡』                  | 1999年 |
| 飯田市教育委員会        | 『北田遺跡』  | 1988年 |
| 茅野市教育委員会        | 『家下遺跡』  | 1995年 |
| 更埴市教育委員会        | 『馬口遺跡II』                                      | 1987年 |
| 同               | 『馬口遺跡VI』                                      | 1992年 |
| 同               | 『北中原遺跡』                                       | 1987年 |
| 同               | 『北中原遺跡II』                                     | 1988年 |
| 同               | 『更埴条里水田址遺跡』                                   | 1996年 |



調査地近景  
(東側より)



南校舎地区全景  
(東側より)



南校舎地区全景  
(北側より)



武道場地区全景  
(北側より)



相談室地区全景  
(西側より)



北校舎地区全景



部室地区全景  
(西側より)



部室地区全景  
(東側より)



1号住居跡  
(南西側より)



20号住居跡  
(南側より)



1号住居跡炉



2号住居跡炉



22号住居跡  
(西側より)



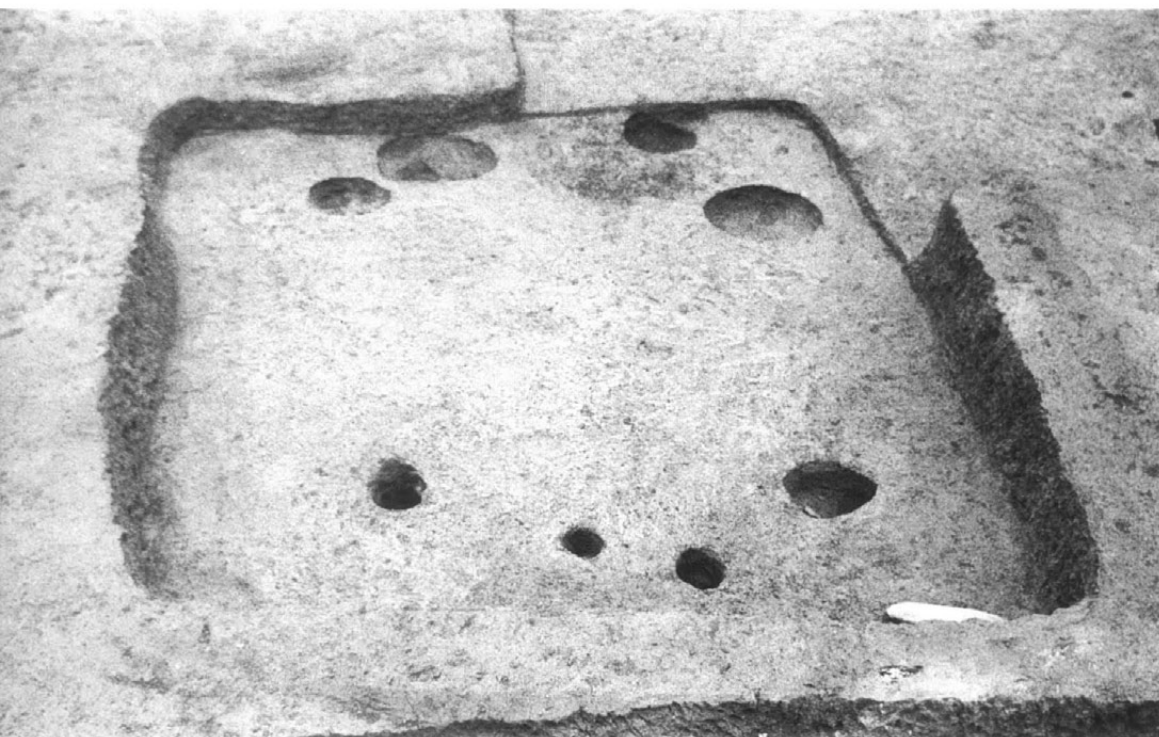
9号土坑  
(西側より)



2号住居跡  
(南側より)



3号住居跡  
(南側より)



12号住居跡  
(南側より)



16号住居跡  
(南側より)





18号住居跡  
(北側より)



2号土坑  
(西側より)



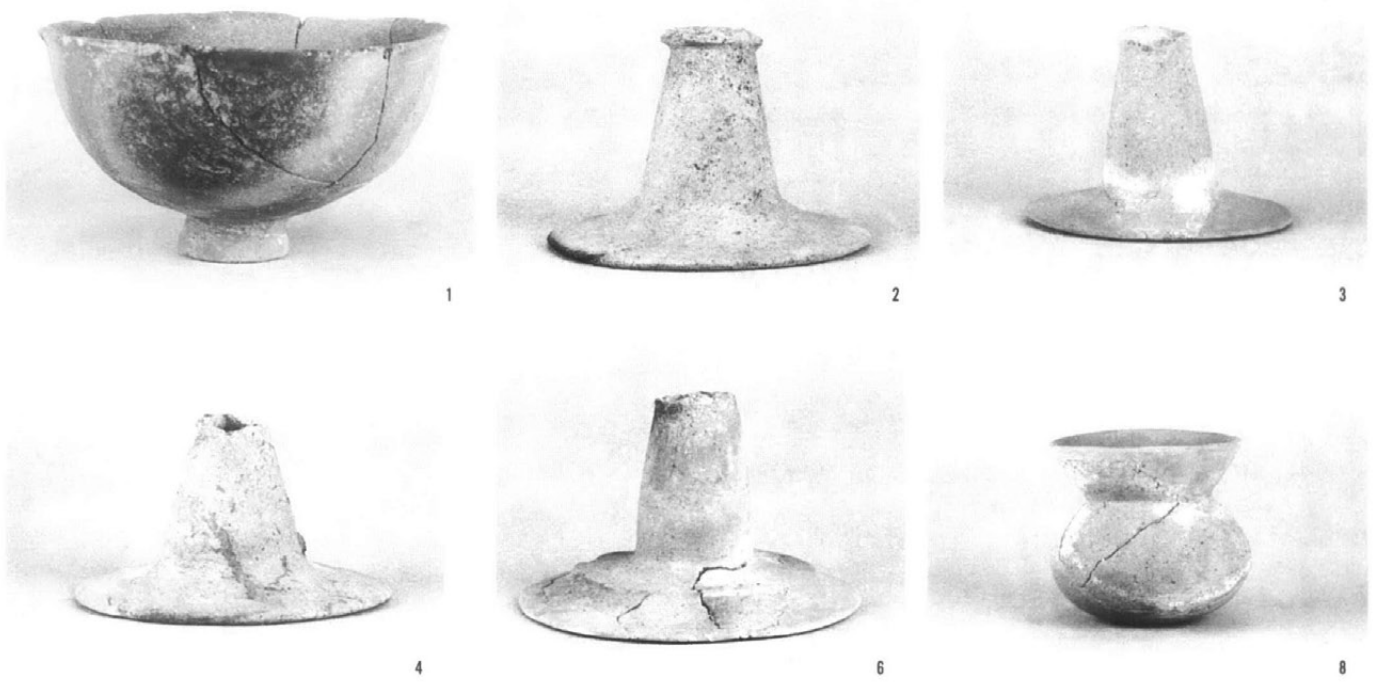
畝状遺構  
(東側より)

图版 8

1号住居跡出土遺物



20号住居跡出土遺物



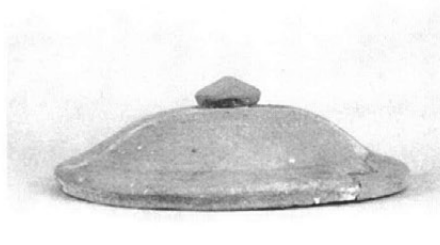
22号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8

12号住居跡出土遺物



1



2



3

18号住居跡出土遺物



2



3



4

图版10

16号住居跡出土遺物



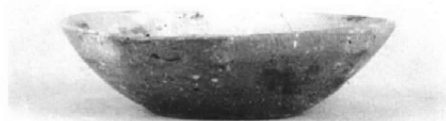
1



2



3



4



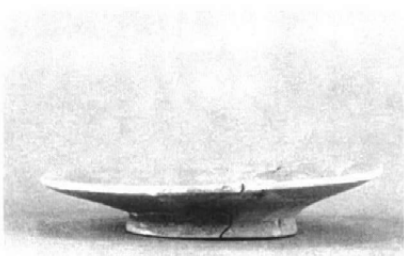
5



6



7



8



9



10



11

10号沟出土遗物



1



2



6

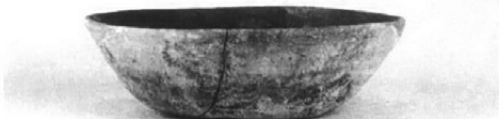
1号沟出土遗物



1



2



3



4



4



5



6



7



8



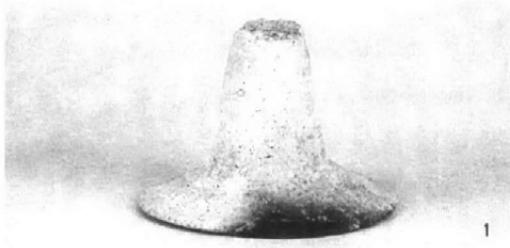
9



10

図版12

9号土坑出土遺物



1

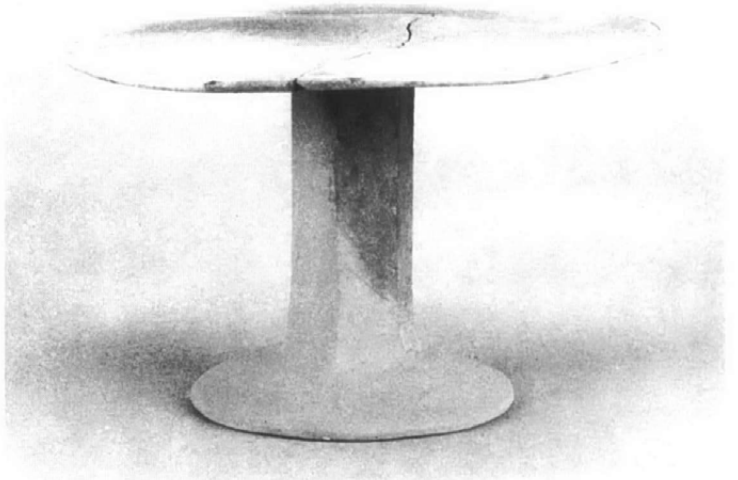


2



3

8号土坑出土遺物



2号土坑出土遺物



1



2



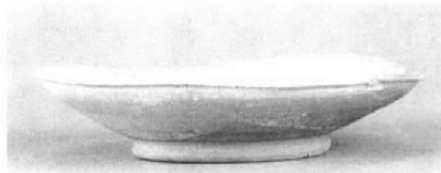
3



4



5



6

その他の遺物



1

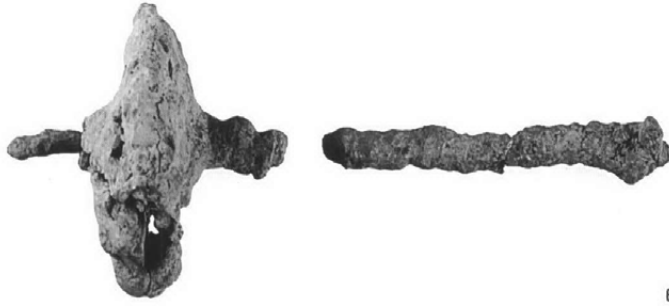


2



3

3号住居跡出土金属器



7

16号住居跡出土金属器



6



12

20号住居跡出土鍛冶関連遺物

羽口

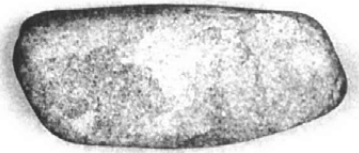
金床石



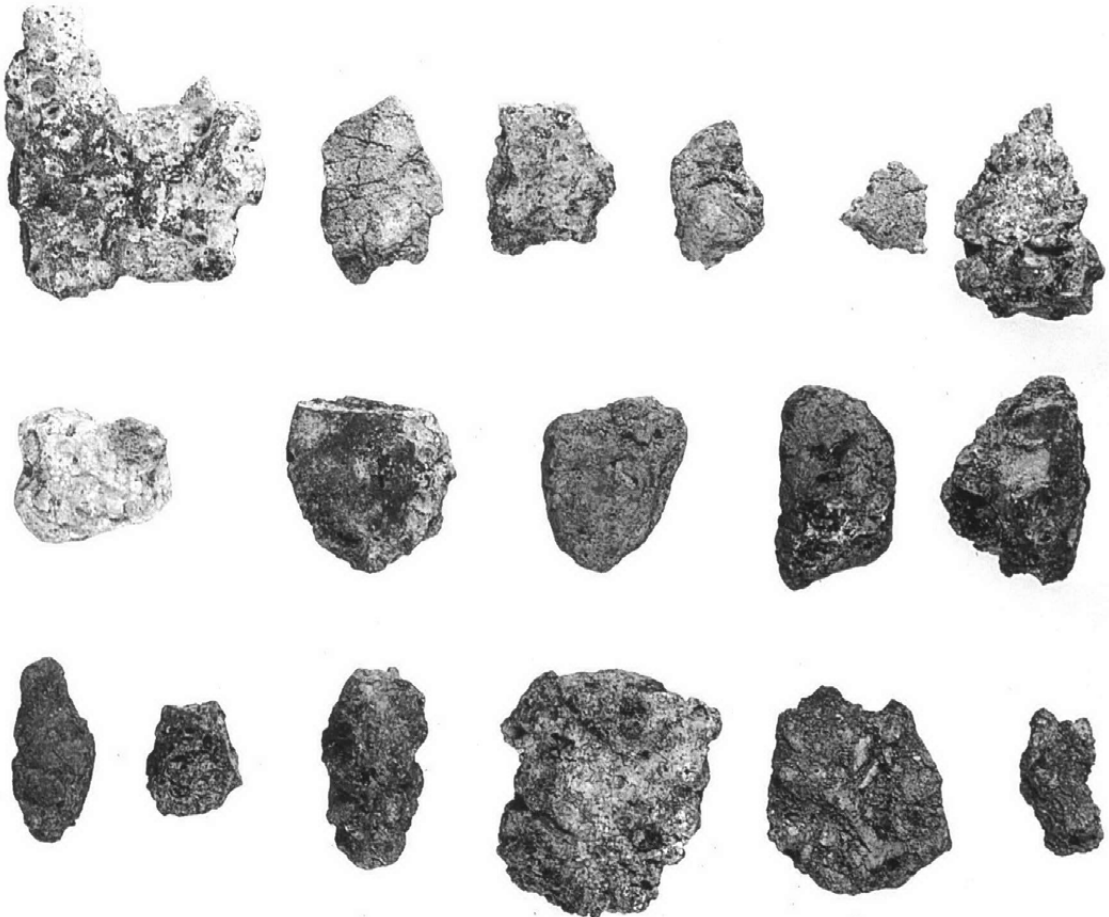
11



12



鉄滓



報告書抄録

ふりがな	おおつかいせき2							
書名	大塚遺跡II							
副書名	一更埴市立屋代中学校改築に伴う発掘調査報告書一							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小野紀男							
編集機関	更埴市教育委員会 生涯学習課 文化財係							
所在地	〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地 TEL 026-273-1111							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町利	遺跡番号					
おおつか 大塚	ながのけん こうしよくし 長野県 更埴市 やしろ おおつか 大字屋代字 大塚	20216	31-1	36 32 19	138 8 19	19970421～ 19971211 19980416～ 19980624 19990412～ 19990507	3,800	更埴市立 屋代中学 校改築に 伴う発掘 調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
大塚	集落跡 水田址	古墳時代	竪穴住居 土坑 溝	9棟 1基 5基	土師器、須恵器、 金属器、鍛冶関連遺物		千曲川右岸の自然堤防 上の集落跡  古墳時代中期の鍛冶関 連遺構の検出  更埴条里水田址へ向か う幹線水路の検出	
		平安時代	竪穴住居 土坑 水田面 溝	15棟 6基 1面 9基				
		中世	土坑 溝	2基 5基				

大塚遺跡 II

発行日 平成12年3月31日

発行 更埴市教育委員会

〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地

電話 (026) 273-1111

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037 長野県長野市西和田470

電話 (026) 243-2105



